【概説】長崎県の弥生時代中期後半から後期の土器

―ソノキ（彼杵）、タカク（高来）、スカ（周賀：長崎市近郊）を中心に―

古門 雅高

はじめに

長崎県本土部の弥生土器の研究には常に資料不足という困難がつきまとう。完形品にお目に掛かることは滅多になく、そのためひたすら同じ破片を凝視し、同じ実測図を眺める日々を送らなければならない。良好な一括資料には数年に一度ほどしか巡りあえず、そのような発掘調査報告書に限って刊行が遅れたりすることがあり、それでもその間じっと耐えて待つ。当地の研究者には忍耐がつきものである。

かつて筆者は本県本土部の弥生後期土器の編年を２度試みたことがある（古門 2005, 2020）。しかし２本の論攷は、いずれも失敗作であったと今は自覚している。その理由は後述するとして、本稿は３度目の正直ということになる。２度も失敗しながら性懲りもなく本稿を執筆したのは筆者が最近、「島原半島系土器」をテーマに論攷を執筆したことが契機となっている（古門 2024）。脱稿後、きわめて個性的なこの土器様式がどのように成立し、展開したのかという疑問を抱き、みたび弥生後期土器に取り組んだというわけである。

なお、本稿の標題を論攷や研究ノートではなく概説としたのは、現状を整理、解説したに過ぎないからである。さらに本稿は遺構ごとに土器の変遷を示しただけで、土器編年案を提示したものではない。土器編年に用いる土器様式の確立のためにはまだまだ資料が不足していると言わざるを得ない。

また、本稿では敬称を略させていただいた。

１　長崎県本土部の弥生後期土器の研究史

筆者の前作の失敗の最大の原因は、弥生後期土器編年の指標を台付甕の口縁部の傾きと底部高のみに求めたことにあった。たしかに台付甕の口縁部は傾きが強い（口縁部が寝た状態）形状から徐々に傾きが弱い（口縁部が立った状態）形状に変化する。底部高においても低いものから高いものへと変化する。しかしその変化の速度はきわめて緩やかで、移行も漸移的であり、画期となるような大きな変化にはならないことが分かった。加えて、当地の台付甕の口縁部の形状が予想以上に多様であったため、口縁の傾きという属性のみでは型式変化を捉えられなかったのである。さらに、当初から本県本土部全体の広域編年を志向したことも時期尚早であった。実際は筆者の想定を超えて、「島原半島系土器」のように地域ごとに個性的な土器文化が形成されていたのである。当地の弥生後期土器の複雑さ、広域編年の難しさがそこにあった。

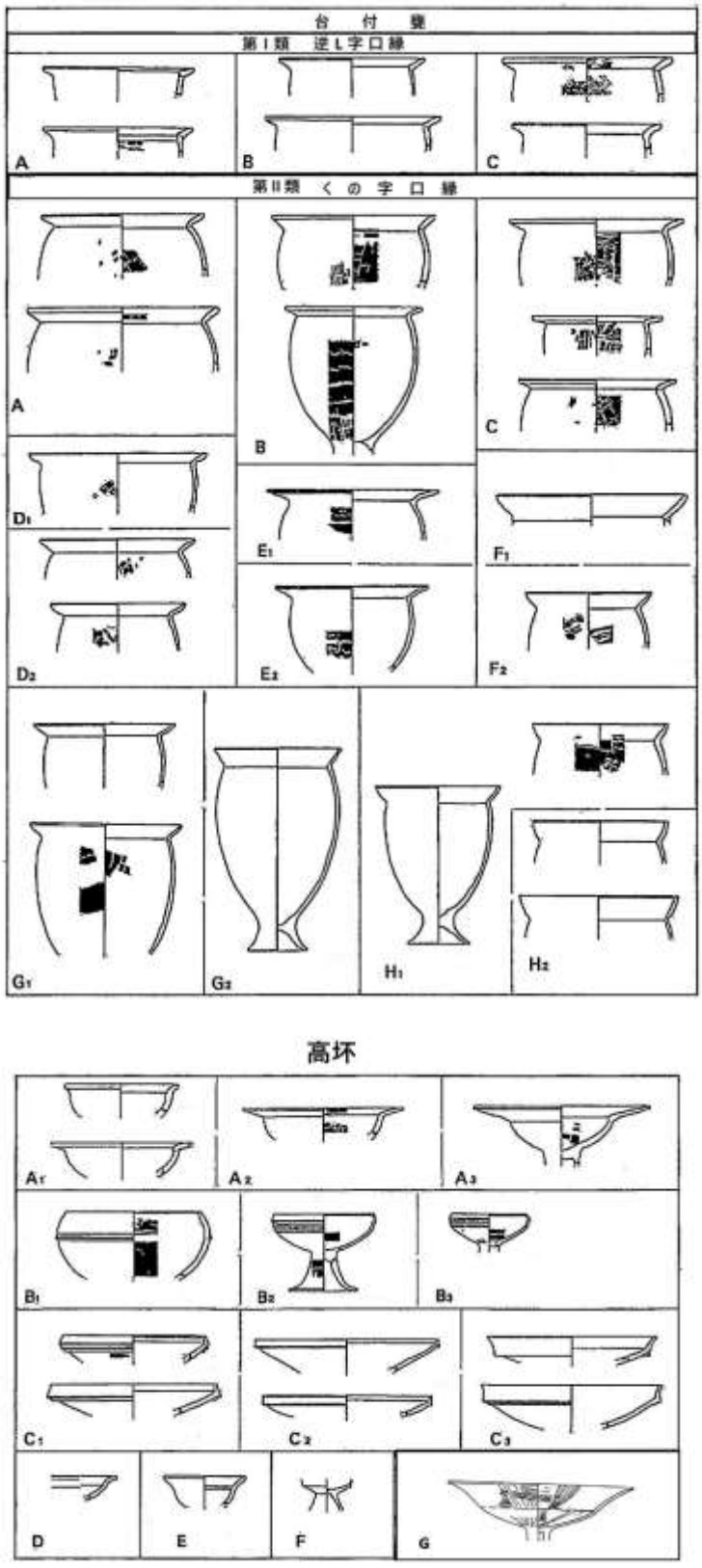
一方で、宮﨑貴夫は調査した遺跡ごとに編年をつくることから始め、その蓄積をもとに広域編年を構築するという方針で研究を開始した。宮﨑の編年は当初より北部九州の弥生後期土器編年や近年では蒲原宏行による佐賀平野の弥生後期土器編年を援用し、その編年の枠組みの中に地元の土器型式を落とし込んでいくという手法をとった。その初期の労作が本県南島原市今福（いまぶく）遺跡の弥生後期土器の型式分類と編年である（宮﨑 1986）。その後はやはり資料不足の壁に阻まれ、体系的な編年を構築するまでには至っていない。しかし、そのことも踏まえつつ本稿は先行する同

氏の弥生後期土器研究の成果と比較検討しながら論を進めていく。

2　本稿の土器研究の方法

では、本稿の土器研究はいかなる方法を用いるかという点をここで簡潔に述べる。まず遺構から出土した土器を形式（器種）によって分類し、その中から型式変化の指標となりそうな属性をとりあげ、その属性の出現や消滅といった変化を画期として把握し、編年の枠組みを設定する。

具体的には台付甕の口縁部の形状変化に着目し、それを型式変化の指標とした。各型式の同時性や共時関係は、できるだけ遺構での共伴で裏付けるようにした。セット関係の普遍性も地域横断的な分布状況を見て担保した。台付甕以外にも画期が分かりやすい形式が複数検討できれば研究の精度は一層増すのだが、ここでも資料不足の壁が立ちふさがる。強いてあげれば高坏形土器が有効であるが、遺構出土品が少なく、限定的にしか利用できない。壺形土器も同様である（註1）。したがって台付甕以外の形式のほとんどは共伴関係が未確認のまま用いざるをえないのが実情であり、各形式の型式組列も十分明らかにできていないことをあらかじめ断っておく（註2）。



第1図　台付甕と高坏の型式一覧（宮崎1986 一部改変）

3　台付甕の変化と画期

ここからは台付甕の型式変化を見ていく。

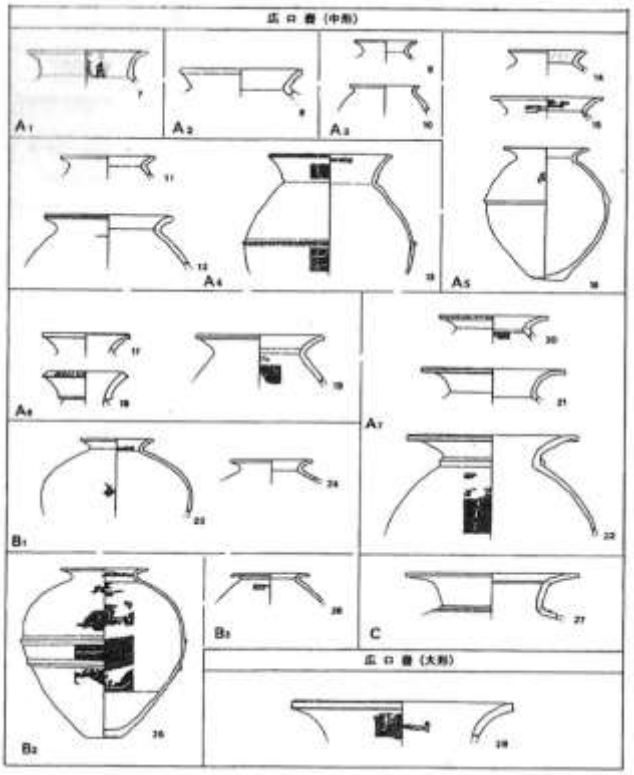
（1）台付甕の型式と変遷

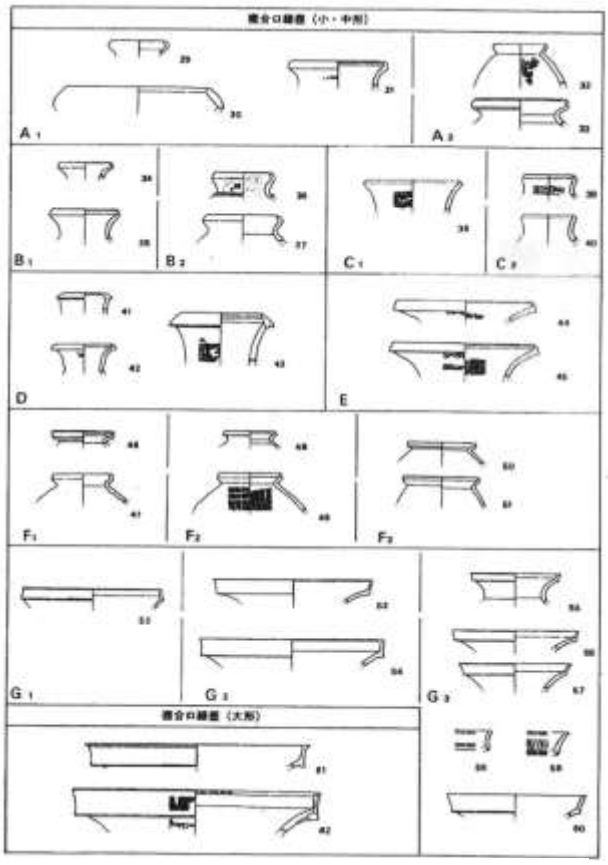
前述したように本稿で編年の指標とした形式は台付甕で、口縁部の形状によって型式を分けた（第1図）。型式の分類記号は、宮﨑が今福遺跡の発掘調査報告書で用いたものを採用した（註3）。以下に編年の指標となる主な口縁部の形状を具体的に述べる。

まず黒髪式土器の台付甕の特徴と言えるしゃくりあがった口縁を持つ台付甕がある。宮﨑による今福遺跡出土土器分類では「中九州系甕」としている（宮﨑1986）。次に、「く」の字口縁（第1図第Ⅱ類　以下「Ⅱ類」とする）と、その祖型と思われる逆Ｌ字口縁（第1図第Ⅰ類　以下「Ⅰ類」とする）がある。さらに逆Ｌ字口縁の中で先端が細く断面の形状が尖り、剣に似ていることから、筆者が剣先形（けんさきがた）口縁と名付けた口縁がある（第1図Ⅰ類A）。

また、「く」の字口縁（第1図Ⅱ類）のうち鳥が翼を広げたような断面を呈する翼状（つばさじょう）口縁（Ⅱ類E）、弱い内彎口縁（Ⅱ類D）、外彎する口縁（Ⅱ類A～C）、顕著な内彎口縁（Ⅱ類G）、直立気味の口縁（Ⅱ類H）がある。ちなみに翼状口縁も筆者の命名である。

表1の左部分はソノキの遺構から出土した台付甕を口縁の形状ごとに時系列で並ぶように整理した一覧表である。この表を見る限り、形状の異なる口縁部が前述の順番どおりに出現しているように見える。また、同表右部分のタカク北部の一覧表でも翼状口縁（Ⅱ類E）を欠く以外は、ソノキと同じような変遷が見て取





第1-2図　壺形土器の型式一覧（宮﨑1986 一部改変）

表1 遺構出土の台付甕の型式別の出現一覧

【ソノキ】

遺構＼甕の型式＼高坏の型式	須玖Ⅱ古	黒髪式	Ⅰ類（逆L字口縁）		Ⅱ類（くの字口縁）					
				剣先形	A～C	E	D	F	G	H
立小路SC02	○	○								
TAK201407 2区SK32	○	○								
TAK201406 3区SC12		○		○						
TAK201407①区SK10			○	○						
TAK201407 4区SC13			○							
TAK201407①区SK11				○	○					
TAK201408B区SC01				○	○	○				
TAK201407 2区SC19			○			○				
TAK201406 3 区SC11				○	○	○				
TAK201407 1区SC8						○				
TAK201506 2区SK9						○				
TAK201303B1区SC123						○				
TAK201407 1区SC6						○				
TAK201506 2区SC15					○	○				
TAK201303A5区SC1					○		○			
TAK201404 A6東区SP69					○					
白井川３号住居									○	○

【タカク北部】

遺構＼甕の型式	須玖Ⅱ式		黒髪式	Ⅰ類（逆L字口縁）		Ⅱ類（くの字口縁）					
	古	新			剣先形	A～C	E	D	F	G	H
十園4区SB02	○		○								
十園32区SB01	○		○								
十園23,24区SD01	○		○								
十園4区SB01	○		○								
火箱遺跡6区SB01			○								
火箱遺跡7区SB02		○		○							
佃87区SB1と土器棺					○			○			
一野2号住居跡						○					
佃84区SB1						○					
十園遺跡27区SB01										○	
十園遺跡26区SD01										○	
伊古遺跡水漬遺構											○

表2　台付甕口縁部の形状変化から見た画期

【ソノキ】

時期		遺構＼甕の型式	須玖Ⅱ古	黒髪式	Ⅰ類（逆L字口縁）		Ⅱ類（くの字口縁）					
						剣先形	A～C	E	D	F	G	H
中期	後葉	立小路SC02	○	○								
		TAK201407②区SK32	○	○								
	終末	TAK201406③区SC12		○		○						
後期１		TAK201407①区SK10			○	○						
		TAK201407④区SC13			○							
		TAK201407①区SK11				○	○					
後期2		TAK201408B区SC01				○	○	○				
		TAK201407②区SC19			○			○				
		TAK201406⑥区SC11				○	○	○				
		TAK201407①区SC8						○				
		TAK201506②区SK9						○				
		TAK201303B1区SC123						○				
		TAK201407①区SC6						○				
		TAK201506②区SC15					○	○				
後期3		TAK201303A5区SC1					○		○			
		TAK201404 A6東区SP69					○					
後期4												
後期5		白井川３号住居									○	○

【タカク北部】

時期		遺構＼甕の型式	須玖Ⅱ式		黒髪式	Ⅰ類（逆L字口縁）		Ⅱ類（くの字口縁）					
			古	新			剣先形	A～C	E	D	F	G	H
中期	後葉	十園4区SB02	○		○								
		十園32区SB01	○		○								
		十園23,24区SD01	○		○								
		十園4区SB01	○		○								
	終末	火箱遺跡6区SB01			○								
		火箱遺跡7区SB02		○		○							
後期1													
後期2		佃87区SB1と土器棺					○			○			
後期3		一野2号住居跡						○					
		佃84区SB1						○					
後期4		十園遺跡27区SB01										○	
		十園遺跡26区SD01										○	
後期5		伊古遺跡水漬遺構											○

れる。当然、序列が逆順である可能性もある。確実に時系列で並んでいるか検証するためには新旧の型式変化が明らかな台付甕以外の形式との共伴関係を確認する必要がある。それには高坏形土器が有効であるが、前述の通り遺構からの出土例が少なく適用できない。現状ではソノキとタカク北部の２つの地域で台付甕口縁部の形状変化が一致するという事実と台付甕の型式変化の新旧を根拠に各型式が時系列で並んでいると強弁する以外にない。ただし結論から述べるならば、本稿の考察の過程で、表１に示した口縁形状の型式変化の序列が破綻したり、矛盾したりすることはなかったので、台付甕の各型式は新旧の時系列で並んでおり、逆順でもないと見てよいであろう（註4)。

（２）台付甕の変遷から見た画期

表２は表１をもとに台付甕の口縁形状の出現と消滅からみた画期を示している。新たな口縁形状の台付甕の出現と共伴する台付甕の口縁形状の種類、さらには消滅時期などを勘案し、画期とした。それによって弥生時代中期を２期に、同後期は５期に分けることができた。それぞれの相対年代は後述する地域の土器様相の中で明らかにする。

なお本稿の中期１や後期２は土器様式名ではなく、一定期間の時期を表した符号に過ぎない。したがって、例えば後期２は蒲原宏行編年の村徳永２式と３式の土器様式に併行する時期と言う意味である（表3)。

また、後期１にはタカク北部で、後期４ではソノキで、それぞれ遺構出土土器の空白時期があることが見て取れる。たまたま発掘調査が及んでいないのか、歴史的な背景があるのか、いずれにしても今後の課題である。

４　弥生中期土器の様相

ここからは時期ごとに各地域の土器様相を概観するが、その前に本稿で用いる地域名を現代の行政区域で示す。ソノキは佐世保市の一部、川棚町、波佐見町、大村市、西海市東部である。タカク北部は諫早市北部、雲仙市北部、島原市が含まれ、同南部は南島原市、雲仙市南部、諫早市南部、長崎市東部が該当する。スカは西海市西部、長崎市西部が該当する。

（１）弥生中期１の土器様相

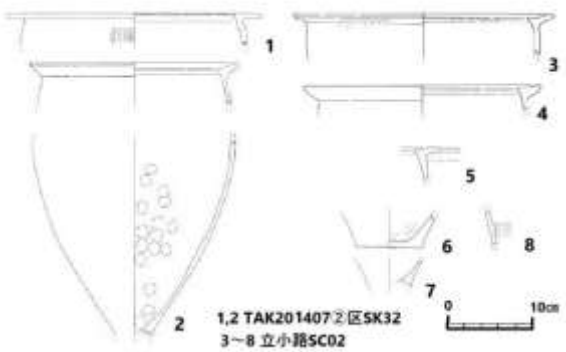
中期１の土器様相は須玖Ⅱ式土器古段階の甕形土器に黒髪式土器様式の甕形土器が伴う段階である。以下、地域ごとに見ていく。

①ソノキ

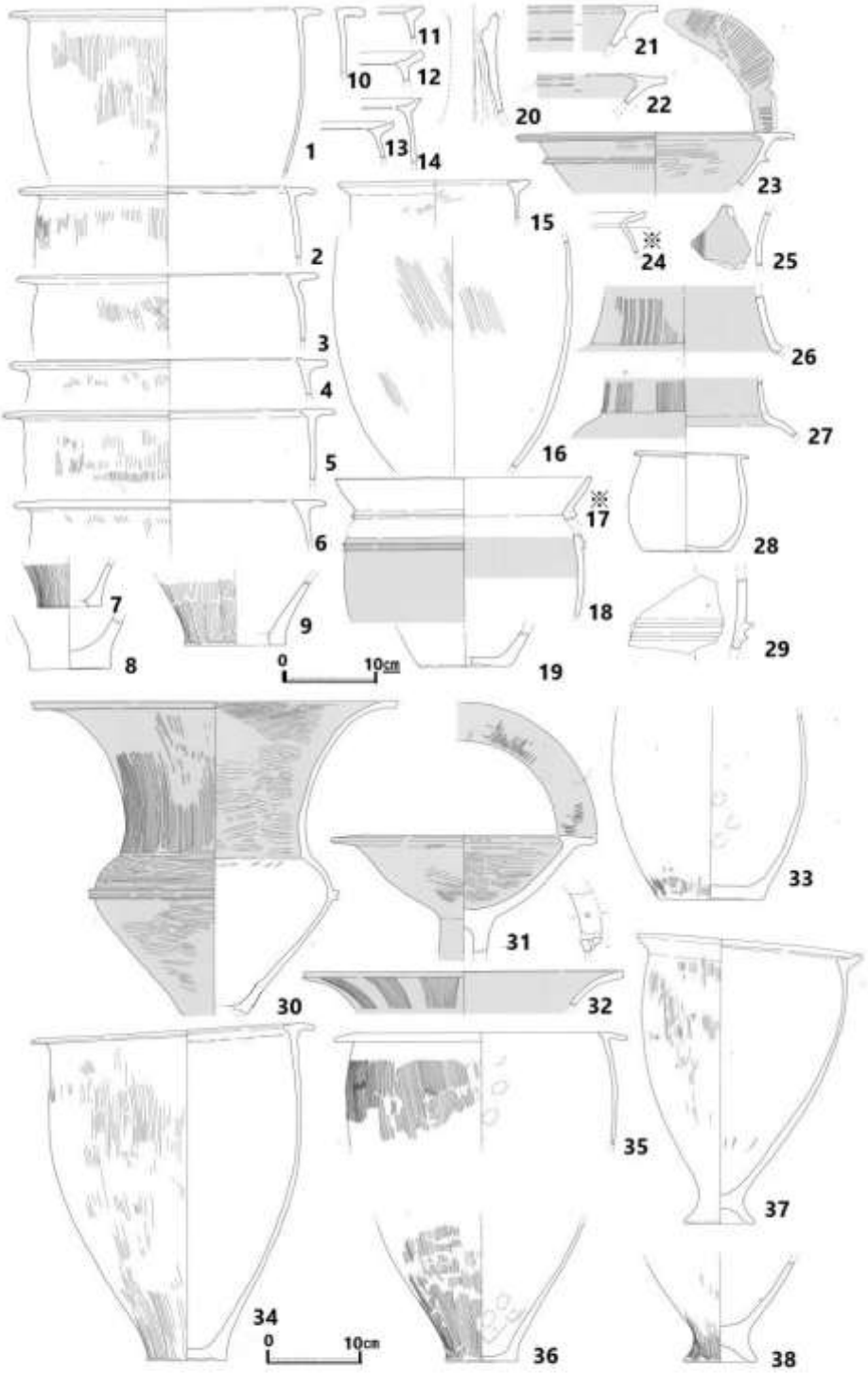
同地域で中期１の指標となる土器群はTAK201407②区SK32（第２図1,2）と立小路（たてしょうじ）遺跡SC02（同図3～8）出土土器である。

なお、TAKは大村市竹松遺跡の略号で、略号の後に調査年（西暦)、大調査区、小調査区そして遺構記号が続く。SKは土坑、SCやSBは竪穴建物跡、SDは溝の記号である。

両遺跡ともに遺構の中で須玖Ⅱ式土器古段階の甕形土器（第２図1,5）に黒髪式土器様式の甕形土器（同図2,3）が伴う。



第２図　中期１の土器（ソノキ）S=1/9



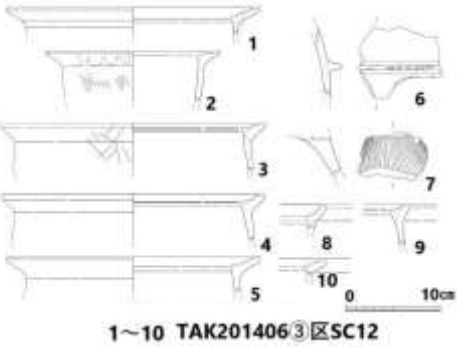
1～29　十園4区SB01

30～38　十園4区SB02

※印　混入の可能性あり

②タカク北部

当地で中期1の指標となる土器は十園遺跡4区SB01（第3図1～29）、同SB02（同図30～38）、同遺跡23,24区SD01である。いずれもソノキと同様に須玖Ⅱ式古段階の甕型土器（同図1～6,34,35）と黒髪式土器様式の甕形土器（同図11～15,37）がそれぞれの遺構で共伴している。同図30の広口壷形土器は田崎編年の須玖Ⅱ式古段階の資料である（田崎1998）（註5）。



第4図　中期2の土器（ソノキ））S=1/9

高坏形土器は第3図21～23,31,32の事例から須玖式土器様式の高坏A類が用いられている。同じく壺形土器も前述の須玖式土器様式の広口壷形土器（同図30）が用いられている。

③タカク南部

当地では永瀬貝塚に須玖Ⅱ式古段階の甕形土器と黒髪式土器様式の甕形土器が見られるくらいで（松藤編1975）、現状では遺構から出土した良好な資料に恵まれない。

以上のようにソノキ、タカク北部の両地域において須玖Ⅱ式土器古段階の土器と黒髪式土器様式の台付甕が遺構の中で共伴しているので、一時期を設定することができる。

（2）中期2の土器様相

弥生中期2の土器様相は須玖Ⅱ式土器新段階の土器や黒髪式土器様式の甕形土器に、逆L字形口縁（第1図の台付甕第Ⅰ類）、その中でも剣先形口縁（同図Ⅰ類A）の台付甕が伴う段階である。

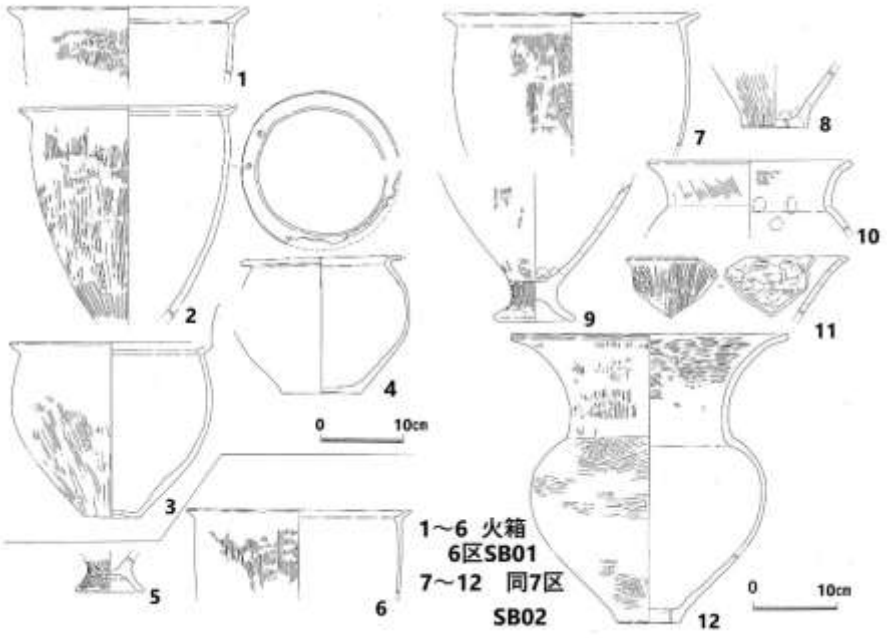
以下、地域ごとに見ていく。

①ソノキ

同地域で中期2の指標となる土器群はTAK201406 ③区SC12出土資料である（第4図1～10）。同図1,2が剣先形口縁（Ⅰ類A）で、黒髪式土器様式の台付甕（第4図3～5,8～10）と共伴する。

②タカク北部

同地域で中期2の指標となる土器群は火箱（ひばこ）遺跡6区SB01出土土器（第5図



第5図　中期2の土器（タカク北部））S=1/9

1～6)、同遺跡第7区SB02出土土器（同図7～12）である。火箱遺跡6区SB01の短頸の壺形土器（第5図4）は北部九州では、「く」の字口縁の祖型とされる屈折口縁で、須玖Ⅱ式土器新段階である。共伴するのは黒髪式土器様式の台付甕である（第5図1～3)。7区SB01の直口広口壷（同図12）は田崎編年の須玖Ⅱ式新段階である（田崎1998)。共伴するのは逆Ｌ字口縁の台付甕（第5図7）である。

③タカク南部

同地域で中期2の指標となる土器群は諫早市の西ノ角（にしのすみ）遺跡B-14土坑出土の土器（第6図1～7）である。同遺跡では田崎編年の須玖Ⅱ式新段階の広口壷形土器（同図1）に剣先形口縁の台付甕（同図3,4）が共伴する。

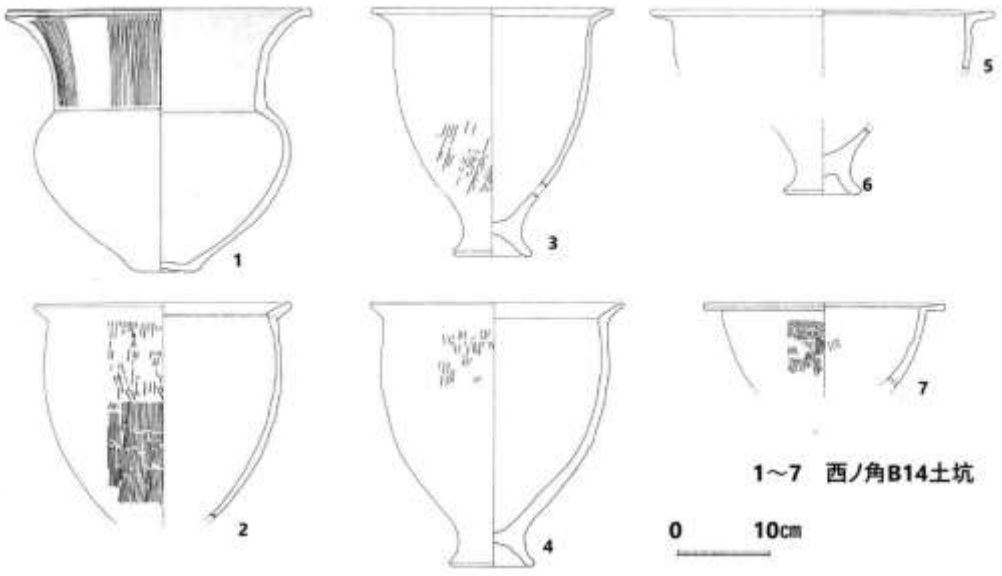
以上のように中期2は須玖Ⅱ式土器新段階の土器や黒髪式土器様式の甕形土器に、逆Ｌ字形口縁（第1図第Ⅰ類)、その中でも剣先形口縁（同図Ⅰ類A）の台付甕が伴う段階である。高坏形土器は西ノ角遺跡の第6図7から見て、前代と同じく高坏A類（第1図）が用いられたようである。広口壷形土器は前代に続いて須玖式土器様式の直口縁広口壷が用いられることが明らかである。このようにソノキとタカク北部および南部で、同じような土器様式が存在することを確認できたので、一時期を設定できる（註6)。

（3）中期1と中期2の相対年代

中期1、同2の存在が確実になったところで、両者の相対年代を示す。中期1は黒髪式系の台付甕が須玖Ⅱ式土器の古段階の土器と共伴し、中期2は逆Ｌ字口縁、特に剣先口縁の台付甕が須玖Ⅱ式土器の新段階の土器と共伴している。したがって前者は須玖Ⅱ式古段階に併行しており、その相対年代は中期後半で、後者は須玖Ⅱ式新段階に併行し、相対年代は中期末と認定できる。

５　弥生時代後期の土器の様相

ここからは当地の弥生時代後期の土器を検討するが、そもそも中期と後期を分かつ土器とは何かという点から整理する。



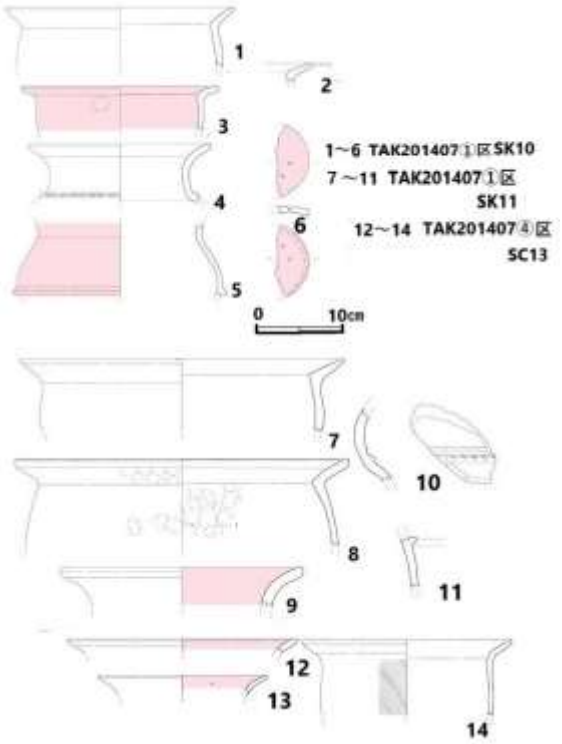
第6図　中期2の土器（タカク南部）S=1/9

（1）弥生時代後期の土器

かつて武末純一は「前期は板付＝如意形口縁、中期は須玖＝水平口縁、後期は高三潴＝「く」字形口縁として区分してきた研究史をふまえるならば、やはり「く」字形口縁口縁の出現をもって後期としたい」と述べた（武末1991 p118）。

その後、同氏は「かつて中期と後期の境界を、学史を踏まえて「く」字口縁甕の成立に求めたことがある。この見解は今でも妥当と考えているが、「く」字口縁に近い中期の屈折口縁と後期の「く」字口縁の弁別が人によって異なることもあり、ここではより明快とみられる袋状口縁壷の複合口縁化に求めた」として、自らの学説の補強を図った（武末1997 p30）。

同氏が述べるように九州の弥生時代後期の土器は「く」の字口縁によって斉一化していくが、「く」の字口縁の出現時期は地域によって相違がある。佐賀平野では小松譲が屈折口縁と袋状口縁壷、頸部の短い三角突帯付広口壷の出現をもって後期とする学説を提起し（小松1998）、蒲原宏行がそれを支持している（蒲原2003）。しかし一方で、佐賀平野では袋状口縁壷が中期末から後期前半まであり、中期と後期の画期とする指標になりえないという見解もある（佐賀県文化課文化財保護室編2020）。



第7図　後期1の土器（ソノキ）　S=1/9

肥後地方では西健一郎が肥後の後期初頭の土器の最大の特徴は「く」の字口縁の出現であり、「甕の内面の突起が消滅して、熊本独自に「く」の字形口縁を作り出すのではなくて、明らかに北部九州の「く」の字形口縁が影響することで、熊本に「く」の字形口縁が出現する」と述べた（西1983 p101）。

また「熊本に丹塗りの複合口縁壷が大量に出現することと、軌を一にしている」とも指摘している（西前掲 同頁）。さらに肥後の中期と後期の土器には断絶があり、それゆえに「黒髪式」という様式名を両方の時期に用いるべきではないという同氏の主張が続く。その後の肥後における弥生後期土器研究は1級河川の流域ごとの編年研究に向かったため、「く」の字口縁の出現といった地域横断的なテーマの研究は進んでいないようである。かつて木崎康弘が「後期に特徴的な甕形土器の「く」の字形口縁の成立がどの段階にあるのかは，今後とも編年研究の上で重要な視点である。」と述べており（木崎1996 P228）、現在でも通用する指摘である。

次に本県本土部の弥生後期の土器様相を後期1から同5まで順次見ていくことにする。

（2）弥生後期1の土器様相

後期1の土器様相は黒髪式土器様式の台付甕が姿を消し、前代に出現した逆L字口縁（第1図第

Ⅰ類）の台付甕が主体となり、そのなかでも剣先形口縁（同図Ⅰ類A）の台付甕が増える。また、新たに「く」の字口縁の台付甕（同図Ⅱ類）が出現する時期である。

壺形土器は須玖式土器様式の直口縁広口壷形土器に代わって、頸部に断面三角形の突帯を付した直口縁広口壷形土器が用いられる。

また宮﨑が「富の原型」と名付けた壺形土器も存在する。

高坏形土器は前代と同じく須玖式土器様式の高坏A類（第1図）が主体と見られる。

以下、地域ごとに見ていく。

①ソノキ

同地域で後期1の指標となる土器群はTAK201407 ①区SK10（第7図1～6）とTAK201407①区SK11（同図7～11）、TAK201407④区SC13出土土器（同図12～14）である。SK10では逆Ｌ字口縁（第7図3）や剣先形口縁の台付甕（同図1,2）と頸部に断面三角形の突帯をもつ直口縁広口壷（同図4）さらに宮﨑の言う「富の原型」壷形土器が伴う（同図5）。SK11でも剣先形口縁の台付甕（同図7）と頸部に断面三角形の突帯を持つ直口縁広口壷（同図9,10）が共伴する。また、宮﨑が今福遺跡の分類でⅡ類A～Cとした「く」の字口縁の台付甕が出土している（第7図8）。SC13でも逆Ｌ字口縁（第7図14）の台付甕と直口縁広口壷（同図12,13）が共伴する。

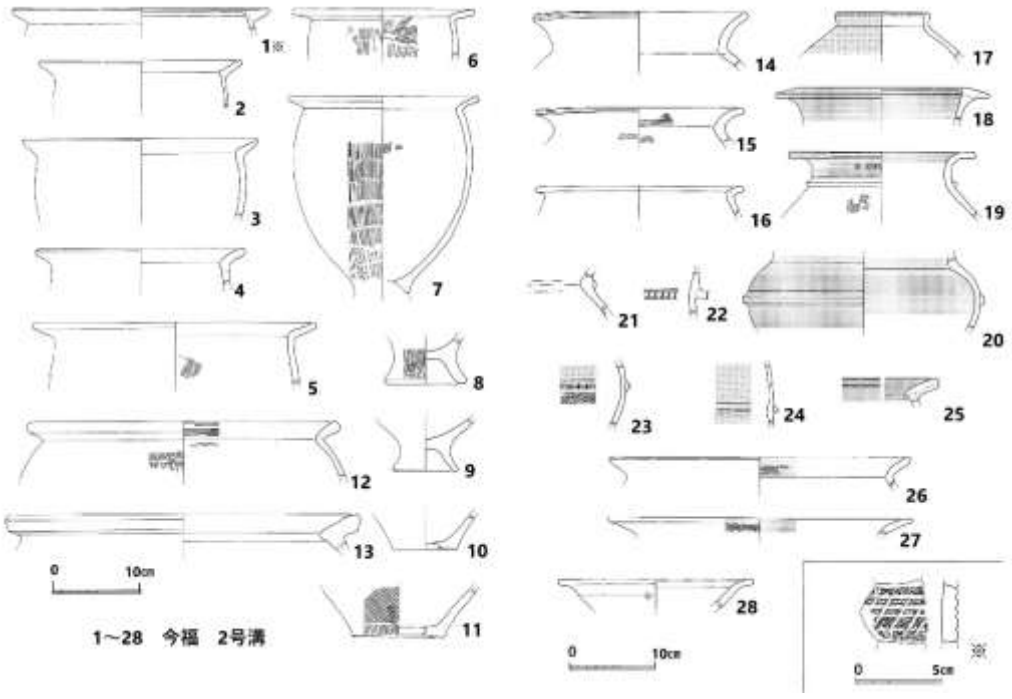
なお、宮﨑はTAK201407 ①区SK10をⅠ期（本稿の後期2）、TAK201407④区SC13をⅣ期（本稿の後期4）としており、筆者の見解とは異なる（表4）。前者の理由は明らかではないが、後者は出土品に凸レンズ状の底部片が含まれており、この土器を住居跡の時期の下限と見てのことであろう。

②タカク北部

同地で後期1の指標となる遺構出土土器は今のところ確認できない。

③タカク南部

当地の後期1の指標となる遺構出土資料には今福遺跡第2号溝出土土器群が挙げられる（第8図



第8図　後期1の土器（タカク南部）S=1/9）　※印　混入の可能性あり

1～28)。台付甕の主体は逆Ｌ字口縁で（同図 2～6)、ソノキに比べ剣先形口縁の台付甕は少ないものの、直口縁の壺にはソノキの後期 1 と同じく頸部に断面三角形の突帯をもつものがある（同図 19)。ただしソノキのそれと比べて口縁部の彎曲が大きい。また、富の原型の壷に類似したものも見られる（同図 20)。ただし、これらの土器群は溝からの出土遺物であるだけに、黒髪式土器様式の甕の口縁部（同図 1※）や肥前型器台（同図※印）など時期を異にする遺物が混在しており、注意が必要である。

他の遺跡では、辻貝塚の 1991 年の第 1 次調査時に、逆Ｌ字形口縁の台付甕、高坏Ｂ類、直口壷で頸部に断面三角形の突帯を持つものなど、当該期に特徴的な土器が見られる。同じく、永瀬貝塚でも逆Ｌ字形口縁の台付甕、高坏Ｂ類、直口縁の壷で頸部に断面三角形の突帯を持つものなど、同様の型式群が存在する。

以上のように弥生後期 1 は逆Ｌ字口縁の台付甕が中心で、「く」の字口縁のⅡ類Ａ～Ｃや同Ｄが加わる時期である。ソノキでは逆Ｌ字形口縁の中でも剣先形口縁の台付甕が主体となる。壺形土器では前代の須玖式土器様式の広口壷に代わり、頸部に断面三角形の突帯を貼り付けた直口の広口壷が盛行する。さらに宮﨑が提唱する「富の原型の壺」が存在する。高坏形土器は、Ａ類が前代に引き続き用いられる。

このように各地域で同じような土器様式が認められるところから一時期を設定することができる。

（3）弥生後期 2 の土器様相

後期 2 のソノキでは、前代の剣先形口縁などの逆Ｌ字形口縁の台付甕が消滅し、「く」の字口縁（Ⅱ類）のうち翼状口縁の台付甕（Ⅱ類Ｅ）が主体となる。壺形土器では複合口縁の壺形土器が出現する。以下、地域ごとに概観する

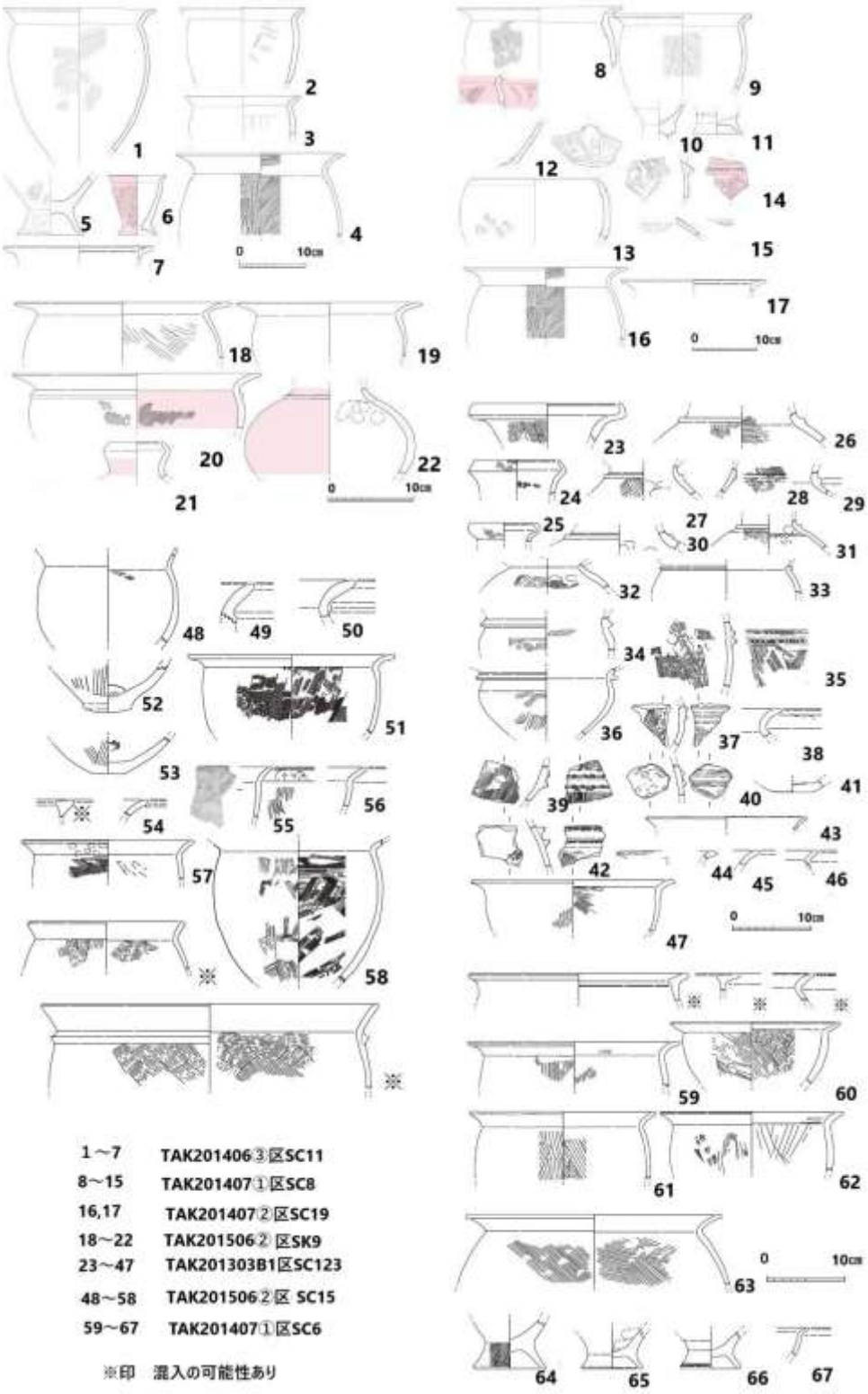
①ソノキ

同地域で後期 2 の指標となる土器群は TAK201406③区 SC11（第 9 図 1～7），TAK201407①区 SC8（同図 8～15)、TAK201407②区 SC19（同図 16,17)、TAK201506②区 SK9（同図 18～22)、TAK201303B1 区 SC123（同図 23～47)、同 SC124、TAK201506②区 SC15（同図 48～58)、TAK201407①区 SC6 出土土器（第 9 図 59～67）である。翼状口縁（Ⅱ類Ｅ）の台付甕(同図 1,4,16,18,19,20,47,51,58,59,63）が主体となり、直口縁の広口壷とともに複合口縁の壺形土器が見られる（同図 23～25)。

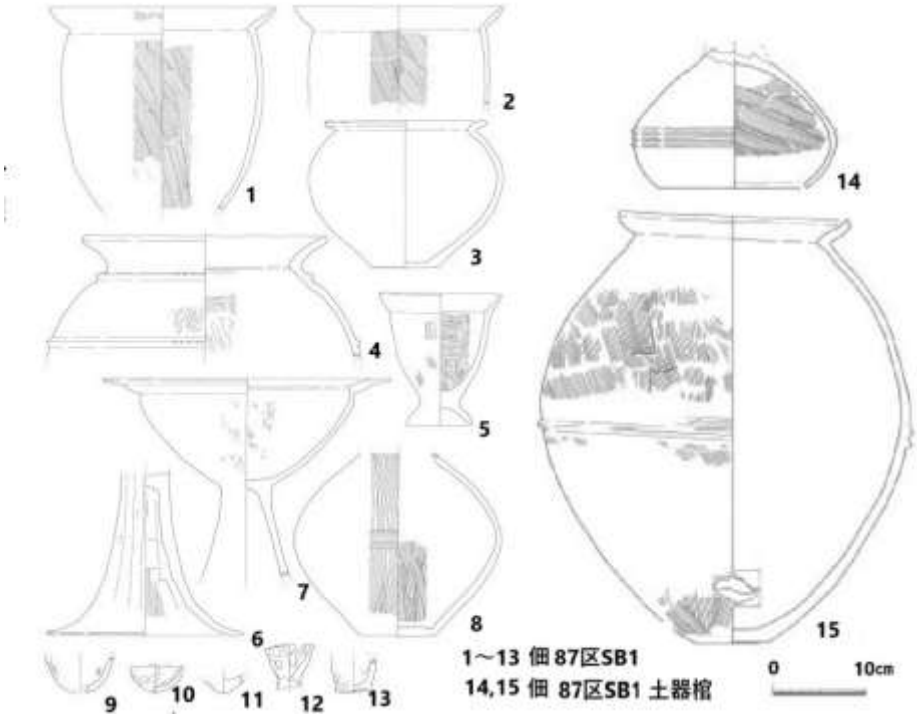
なお宮﨑は TAK201406③区 SC11 をⅢ期（本稿の後期 3）に、TAK201303B1 区 SC124（本稿では挿図不掲載）と TAK201506②区 SC15 をⅣ期（本稿の後期 4）としており、筆者の見解とは異なる（表 4)

②タカク北部

同地域で後期 2 の指標となる土器群は佃（つくだ）遺跡 87 区 SB1（第 10 図 1～13）と同遺構から出土した土器棺である（同図 14,15)。剣先形口縁の台付甕（同図 2,5）に、「く」の字口縁であるⅡ類Ｄ（同図 1）が共伴する。同期の指標となる台付甕Ⅱ類Ｅ（翼状口縁）が見られないが、現状ではタカク北部にそれが見られないことや、土器棺の型式が蒲原編年の村徳永 2 式に類似することを根拠に当該期とした。さらに翼状口縁を持つ台付甕ないし同鉢が共伴する武雄市納手（のうて）遺跡は当該期であるが、共伴する台付甕（第 25 図 2）が第 10 図 1 の台付甕と型式的に一致することも根拠とした。



第9図 後期2の土器（ソノキ）S=1/9



第10図　後期2の土器（タカク北部）S=1/9

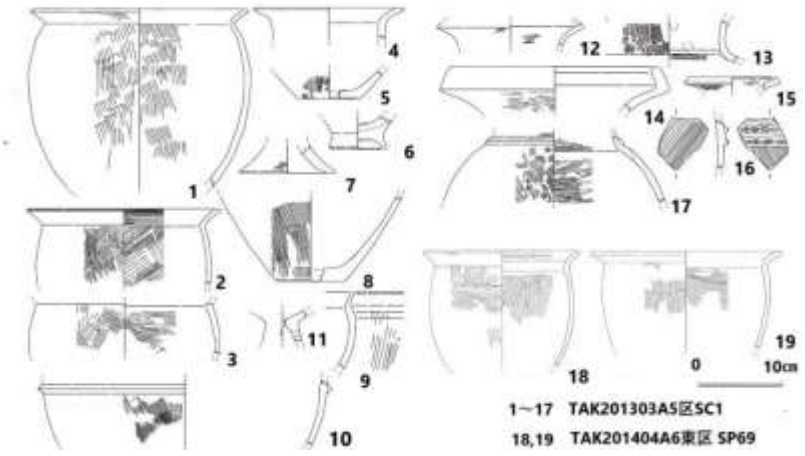
なお、宮﨑はこの佃遺跡87区SB1出土土器をⅣ期（本稿の後期4）としており、筆者の見解とは異なる（表4）。

③タカク南部

当地では当該期の遺構出土資料に恵まれないが、辻貝塚1991年の１次調査の出土品の中に翼状口縁の台付甕（Ⅱ類E）がある。

以上のように後期2のソノキでは、前代の剣先形口縁（Ⅰ類A）の台付甕から翼状口縁（Ⅱ類E）の台付甕に変化する。壺形土器では袋状口縁から変化した複合口縁の壺形土器が出現し、高坏形土器は前代の高坏A類、同B類が継承される。

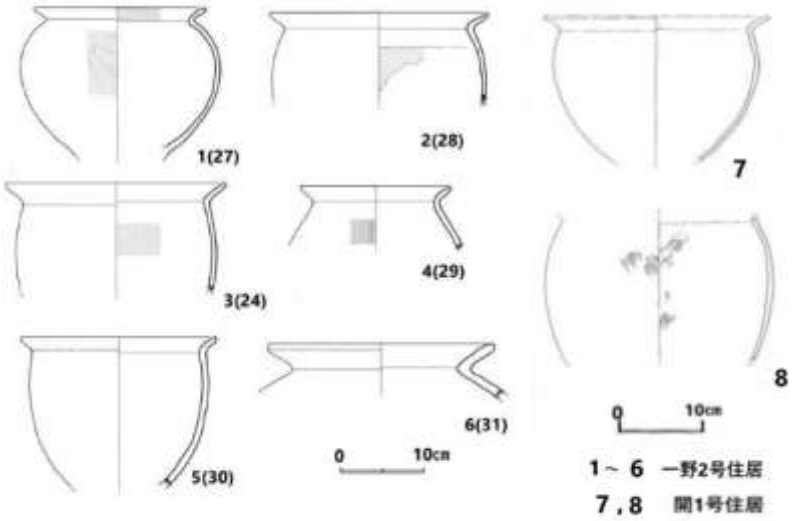
当該期のタカク北部では今のところ、翼状口縁の台付甕が遺構から出土した事例が確認できないものの、タカク南部では辻貝塚から出土しており、一時期を設定できる可能性が高い。



第11図　後期3の土器（ソノキ）S=1/9

（4）弥生後期3の土器様相

後期3は前代の翼状口縁（Ⅱ類E）の台付甕に代わって、「く」の字口縁のうち、外彎ないし直口縁の台付甕（第1図Ⅱ類A～C）が主体となる時期である。「島原半島系土器」といえば内彎する口縁という印象が強いが、同土器が成立する直前のこの時期は外彎ないし直口の「く」の字口縁の台付甕が用いられていることが注目される。複合口縁の壷形土器も前代に続き盛行する。高坏形土器は良好な資料に恵まれないが、前代の高坏A類を継承していると考えられる。



第12図　後期3の土器（タカク北部・南部）S=1/9

（ ）内は発掘調査報告書の挿図番号

以下、地域ごとに概観する。

①ソノキ

同地域で後期3の指標となる土器群はTAK201303A5区SC1（第11図1～17），TAK201404A6東区SP69（同図 18,19）出土土器である。「く」の字口縁の台付甕(同図1,2,18,19)、複合口縁の壺形土器（同図12.14）など、この時期の代表的な型式がそろっている。

なお、宮崎編年ではTAK201303A5区SC1をⅡ期（本稿の後期2）としており、筆者の見解とは異なる。なお氏はTAK201404A6東区SP69を編年対象としていない。

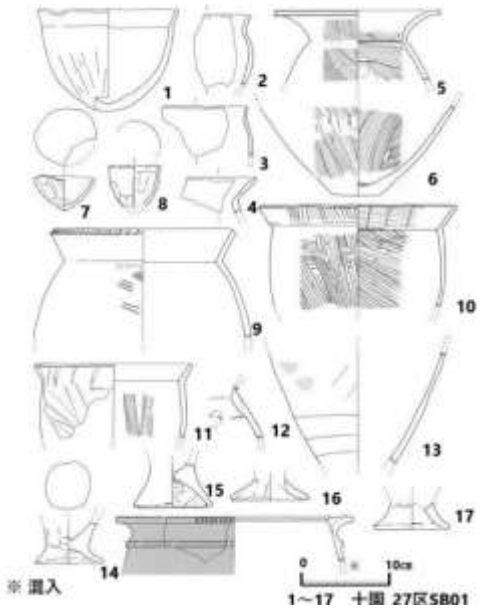
①タカク北部

同地域で後期3の指標となる土器群は一野（ひとの）遺跡2号住居跡出土土器群（第12図1～6）である。「く」の字口縁の台付甕が主体である。今回筆者が再実測を行った。

なお、宮崎編年では同土器をⅡ期（本稿の後期2）としており、筆者の見解とは異なる。

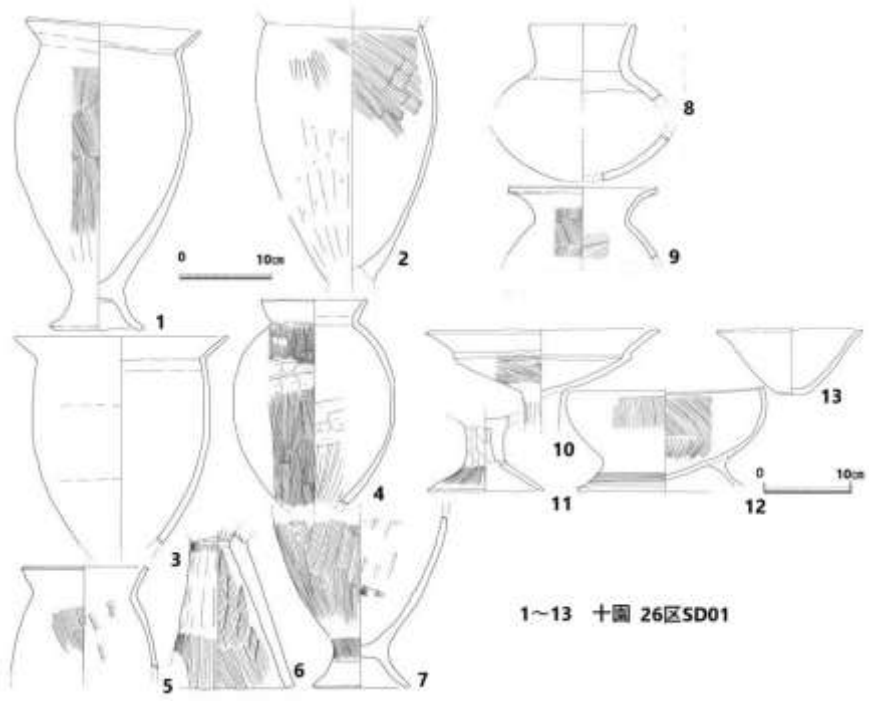
②タカク南部

当地で後期3の指標となる土器は開（ひらき）遺跡1号住居跡出土土器（第12図7,8）である。開遺跡の竪穴建物跡から出土した土器には、炉跡および床面付近から出土した台付甕（同図7,8）と同建物跡北



第13図　後期4の土器（タカク北部）S=1/9

西隅から出土した丹塗りの壺形土器と高坏形土器がある。発掘担当者は丹塗りの壺と高坏を建物廃絶時の祭祀に伴うものと認識しているが、土器自体は須玖Ⅱ式新段階の直口縁の広口壷と高坏で、本稿の弥生中期2に属す。したがって台付甕とは時期を異にするので、丹塗りの土器群は、当該住居跡より以前につくられた遺構の遺物ではないかと筆者は推測する（註7）。



第13-2図　後期4の土器（タカク北部②）S=1/9

なお、宮﨑は開遺跡住居跡出土土器を編年対象としていない。

以上のように弥生後期3は、前代の翼状口縁（Ⅱ類E）に代わって、「く」の字口縁（Ⅱ類）のうち外彎ないし直口縁の台付甕（Ⅱ類A～C）が主体となる時期である。壺形土器は複合口縁の土器が主体で、高坏形土器は良好な資料に恵まれず詳細は不明である。このようにソノキ、タカク北部・南部の地域で同型式の台付甕が分布するところから一時期を設定することができる。

（5）弥生後期4の土器様相

前代の後期3まではソノキ、タカク北部、同南部ともに類似した土器を用いているが、後期4以降は各地域で土器の様相が一変する。当該期はタカク南部に、いわゆる「島原半島系土器」が出現する時期である。ただし、ソノキでは遺構から出土した資料に恵まれない。

以下、地域ごとに概観する。

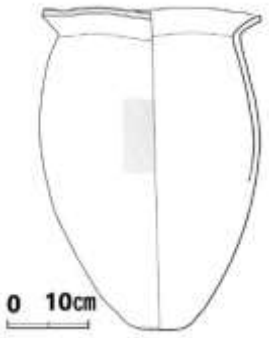
①ソノキ

前述のように当地では当該期の遺構出土資料に恵まれない。

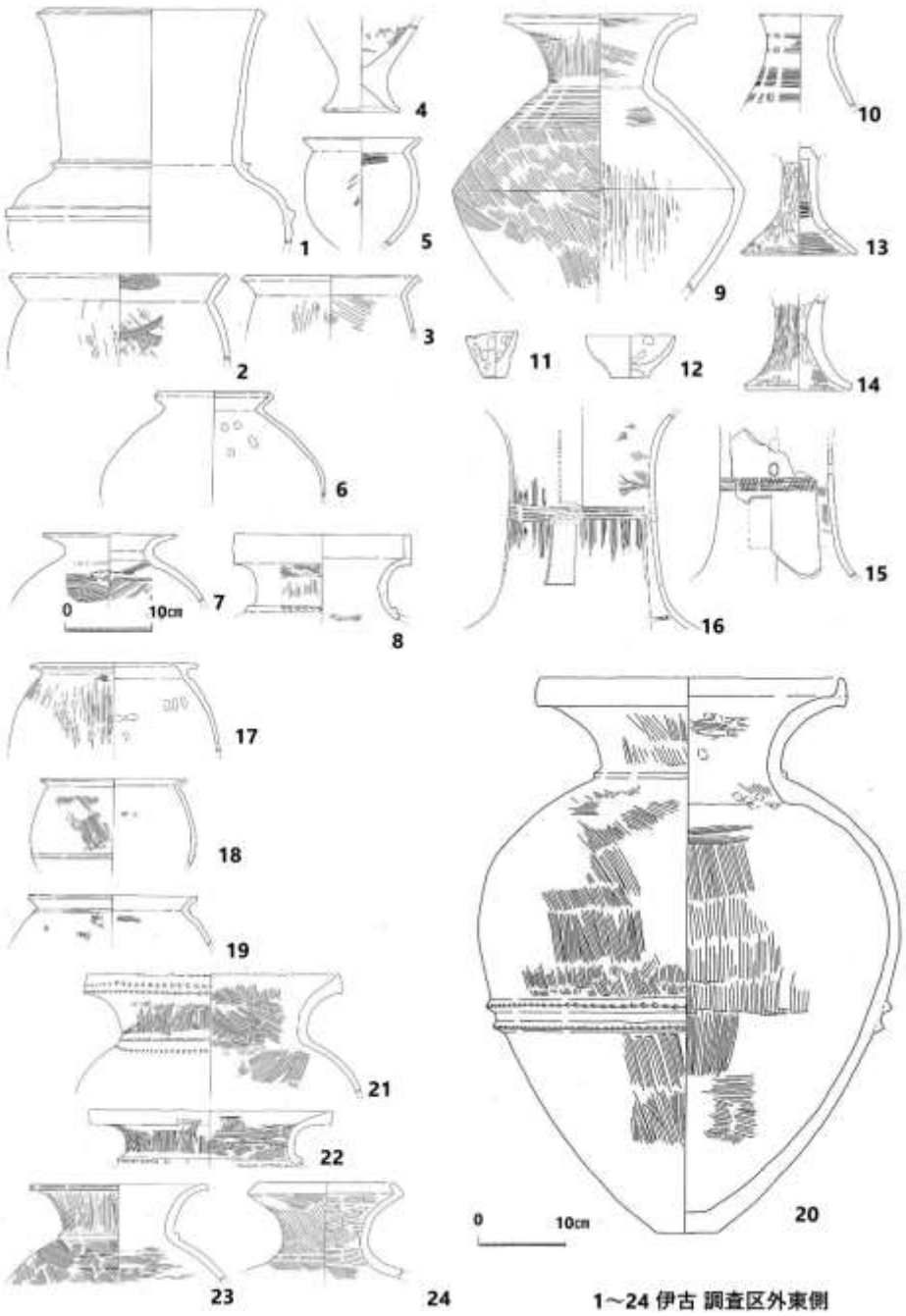
② タカク北部

当地で後期4の指標となる土器群は十園遺跡27区SB01（第13図1～17）、同遺跡26区SD01（第13-2図1～13）、陣ノ内遺跡Ⅰ-D区2号住居跡出土土器（第14図）である。

十園遺跡27区SB01には台付甕Ⅱ類G（第13図10,11）、広口壷A6類（同図5）の「島原半島系土器」が存在する。一方で口唇部に刻目が



第14図　陣ノ内遺跡Ⅰ-D区2号住居跡出土土器 S=1/9



第 15 図　後期 4 の土器（タカク北部③）S=1/9

施された肥後系の台付甕（第 13 図 9）が見られる。「島原半島系土器」の台付甕は口唇部に刻み目を施さない。

十園遺跡 26 区 SD01 では「島原半島系土器」の台付甕Ⅱ類G（第 13-2 図 1, 3）、高坏D類（同図 10）、広口壷A6 類（同図 9）が見られる。広口壷A6 類は、前述した同時期の十園遺跡 27 区 SB01 でも共伴しており（第 13 図 5）、元々は黒髪式土器の広口壷からの系譜がたどれる形式ながら、在地化している。同時期では薩摩半島西部に展開する松木薗式土器の広口壷にも類似した型式を見ることができる。

注目されるのは、長脚の脚台である（第 13-2 図 6）。肥後地方中部の白川、緑川流域では後期後葉に台付甕の長脚化が見られるが、その影響と思われる。さらに菊池川流域のうてな遺跡などで出土している肥後系の台付鉢（同図 12）も共伴している（熊本県教委編 1992）。

このようにタカク北部の後期 4 の土器には肥後北部の土器の影響が窺える。そのことを如実に示す出土遺物として遺構出土土器ではないが、雲仙市伊古（いこ）遺跡の D6 区調査区外東側出土資料をとりあげる（第 15 図 1～24）。出土状況の詳細が報告書に記載されていないため、包含層出土資料として取り扱わざるを得ないが、特に短頸の広口壷に特徴がある。同図 21 と 22 の広口壷は口縁端を肥厚させて文様帯を作っており、併せて頸部に竹管文やノッチ状の斜めの刻み目を施す。これには熊本県北部の菊池川流域の後期後半の土器様式である野部田（のべた）式土器の影響が窺える（註 8）。同図 15、16 の肥前型器台には胴部に斜めのノッチ状の刻みや連続した竹管による刺突文が見られ、前述の野部田式土器の壺形土器と共通する施文である。同図 9 の長頸の壺形土器も胴部は算盤玉状を呈しており、肥後の土器に特徴的な器形である。

一方で、同図 20 の完形に復元された土器は宮﨑貴夫によって「西ノ角（にしのすみ）型」と命名された壺形土器である。口縁部を直立させるのは「島原半島系土器」の大きな特徴であり、隣接する肥後の弥生後期の壷形土器とは形状を異にする（註 9）。さらに同図 6 の複合口縁の短頸壷は宮﨑の今福分類では複合口縁壷 F 類（第 1-2 図）で、これも島原半島系土器に特徴的な口縁部である。ただし、同じ複合口縁壷でも同図 8 は島原半島系土器の分布の中心である今福遺跡出土土器には存在しない型式である（註 10）。

このように伊古遺跡から出土した土器群は島原半島系土器と肥後の野部田式土器双方の影響を受け在地化した土器群と評価できる。資料の制約から土器様式の全容は窺い知れないが、注目すべき土器群である。

また、第 14 図の陣ノ内遺跡Ⅰ-D区 2 号住居跡出土土器は凸レンズ状の底部をもつ弥生後期後半の下大隈式系の甕形土器で、近隣地域と同様に長胴傾向にある（器高／口径=1.4）。今回筆者が再実測を行った。胴部下半にわずかながらタタキの痕跡が残る（註 11）。伊古遺跡Q区 SD1 から出土した後出の長胴甕（器高／口径=1.6）と口唇部の中央を窪ませている特徴が共通しており、既に在地化していると思われる（雲仙市教委編 2010）。

なお、宮﨑は十園 26 区 SD01 をⅥ期（本稿の後期 5）に位置付けており、筆者とは見解が異なる（表 4）。また同氏は、その他の上記土器群を編年対象としていない。

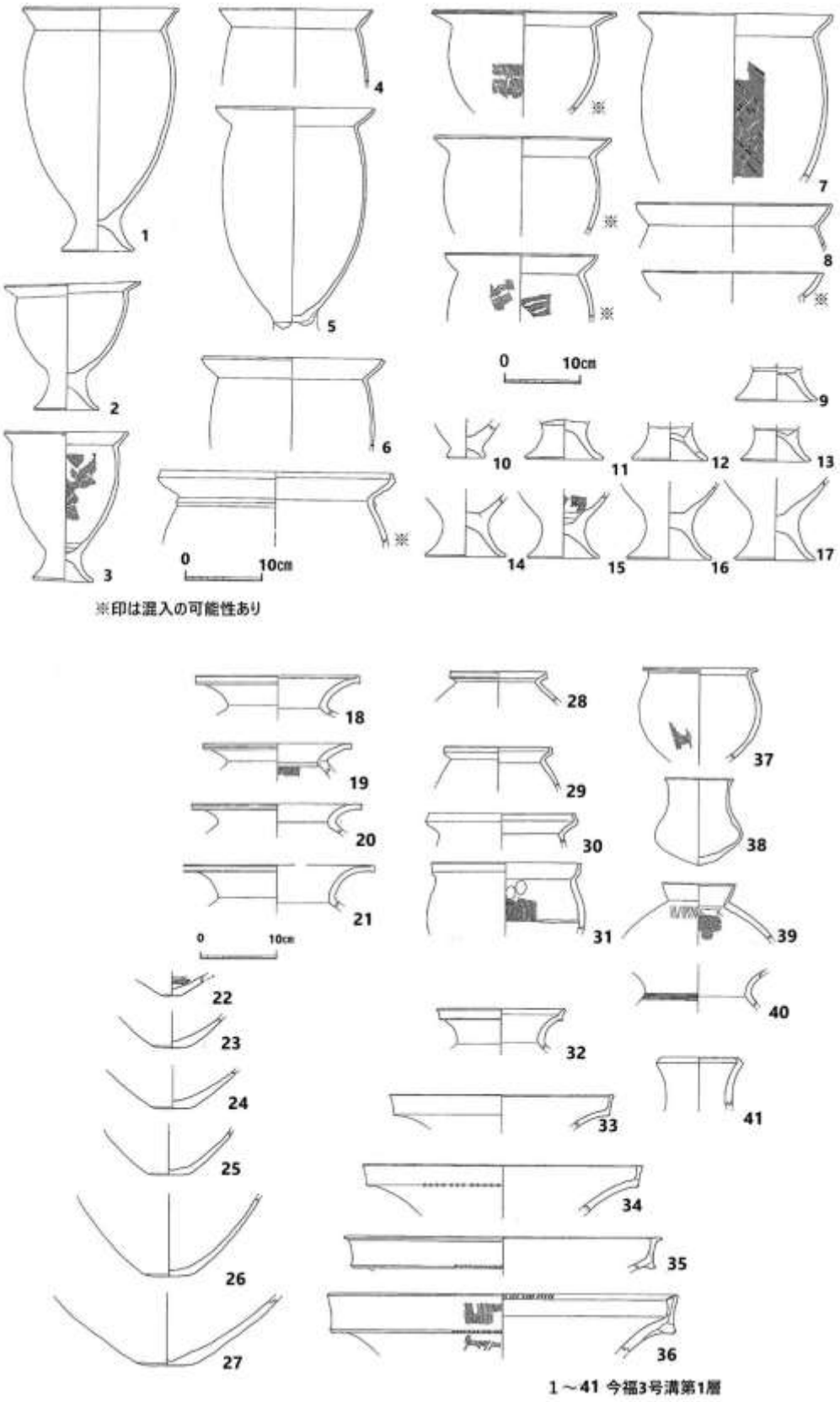
以上、タカク北部の後期 4 の土器様相は菊池川流域の野部田式土器やタカク北部の「島原半島系土器」の影響を受けつつ在地化した土器と言えよう。さらに肥後中部の白川・緑川流域の土器文化や同南部の球磨川流域、さらには薩北地域の松木薗式土器と相通じる特徴もあり、複雑な様相を見せる。

③タカク南部

当地の後期 4 の指標となる土器群は「島原半島系土器」と呼ばれる土器群で、今福遺跡第 3 号溝第 1 層出土土器（第 16 図 1～36、第 17 図 1～26）と同遺跡C9,10 区住居跡出土土器（第 18 図 1～13）が指標である。

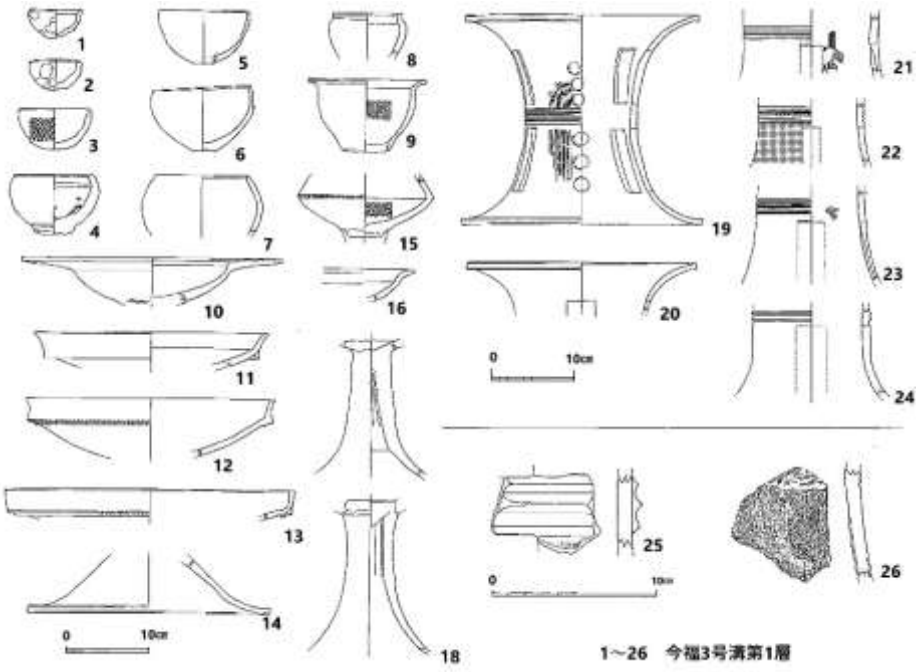
貝塚では辻貝塚 1991 年の 2 次調査の出土土器にも見られる。

「島原半島系土器」の特徴は何といっても台付甕の口縁部が内彎することで（第 14 図 3～8）、他には口縁部径が胴部最大径より大きく、胴が張らないことも特徴である。壺形土器は直口縁広口壷



第16図　後期4の土器（タカク南部）S=1/9　※印は混入の可能性あり

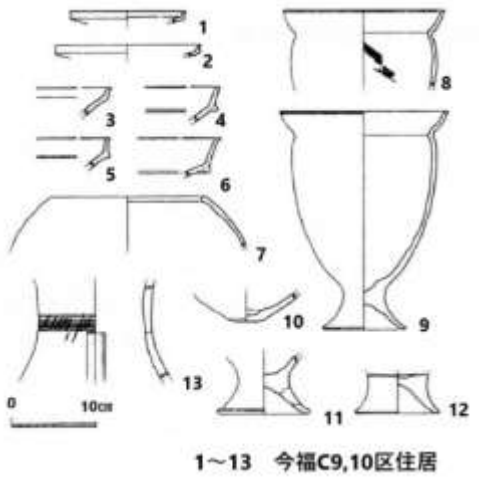
（宮﨑の今福分類のA～C）（第1-2 図）と複合口縁壷（宮﨑の今福分類のA～G）（第1-2 図）があるが、特に複合口縁壷F（第 16 図 28～31）や同G（同図32～36）などは「島原半島系土器」の複合口縁壷形土器を代表する型式で、他地域には見られない。高坏形土器は中期の須玖



第 17 図　後期 4 の土器（タカク南部②）S=1/9　25, 26 は S=1/5

式土器の系譜を引く高坏A類（第 17 図 10）が引き続き用いられる一方で、新しく高坏C類（同図11～13）と同D類（同図 16）が出現する。高坏C類は口縁部を複合口縁壷形土器と同じように直立させる形状が特徴で、隣接する肥後の白川・緑川流域で盛行するS字状口縁の高坏とも異なる独自の型式である。内彎する口縁部をもつ台付甕、直立する複合口縁の壺形土器と並んで「島原半島系土器」の代表的型式である。さらに肥前型器台（同図 19～24）が出現することも大きな画期であり、甕・壷・高坏・器台それぞれに独自の型式がそろうことになる。

今福遺跡C9, 10 区出土土器は台付甕Ⅱ類G（第 18 図 8, 9）に「島原半島系土器」に特徴的な複合口縁の壷ないし高坏C類が共伴する（同図 1～6）。同図 9 の台付甕は、佐賀県武雄市の納手遺跡のSK403 から同型式の台付甕が出土しており（第 19 図 7）（武雄市教委編 1986）、共伴する短頸の壷形土器（同図 5, 6）は蒲原編年の惣座 0 式で、同式は後期後半新段階とされている（蒲原 2003）。したがって今福遺跡 C9, 10 区住居跡出土土器群には、次の後期 5 の指標となる高坏G類が見られない点も併せて、当該期であると筆者は考えており、Ⅵ期（本稿の後期 5）とする宮﨑の見解とは一致しない（表 4）。

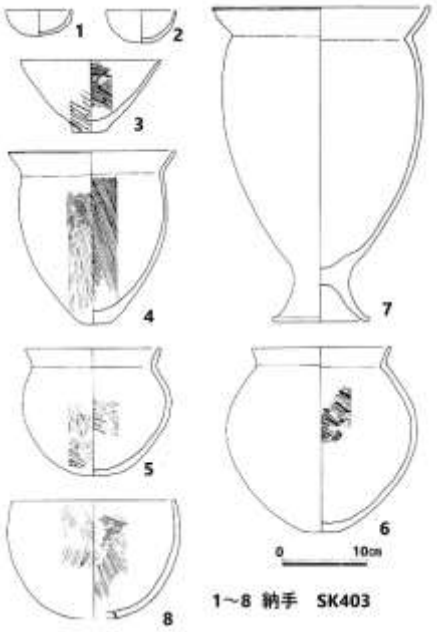


第 18 図　後期 4 の土器（タカク南部③）S=1/9

一方で「島原半島系土器」とは異なる土器が諫早市西ノ角遺跡の住居跡から出土している（第 20 図 1～12）。同遺跡はタカク南部でも橘湾沿岸に位置し、島原半島南部とは若干の距離がある。住居跡から出土した台付甕は「島原半島系土器」の台

付甕Ⅱ類G（同図3）で、高坏形土器（同図7）は坏部の屈曲部しか遺っていないため、高坏D類か高坏G類かの判断が難しい。台付甕Ⅱ類Hが見られないことや鉢（同図 5）の底部の丸底化が不十分であることなどから当該期と判断した。なお口縁部がラッパ状（朝顔形）に開く壷形土器（同図1）や胴部最大径が胴部下半にあり、底部が丸底の可能性もある甕（同図4）、算盤状の胴部をもつ短頸壷（同図6）、さらに台付鉢（同図11）など、後期4のタカク北部の十園遺跡や伊古遺跡と同様に「島原半島系土器」と肥後北部の菊池川流域に展開する土器双方の影響を受けて在地化した土器と考える。

なお、今福遺跡第3号溝第1層、西ノ角遺跡住居跡出土土器の時期は宮﨑と見解が一致している（表4）。



第19図　佐賀県武雄市納手遺跡出土土器②　S=1/9

以上のように、後期4は「島原半島系土器」という土器様式が成立する時期であり、弥生時代を通じて本県本土部で初めて成立した土器様式と評価できよう。

一方、前述のようにタカク北部の土器様式は肥後の弥生後期後半の土器様式である野部田式土器の影響を受けて在地化した土器群と「島原半島系土器」の影響を受けて在地化した土器群が共存する。さらにタカク南部の西ノ角遺跡においても同様な傾向を見ることができる。様式設定をするには資料不足で、今後の課題であるが、いずれにしても後期4の島原半島の北部と南部では土器様式が大きく異なることが分かる。

（6）弥生後期5の土器様相

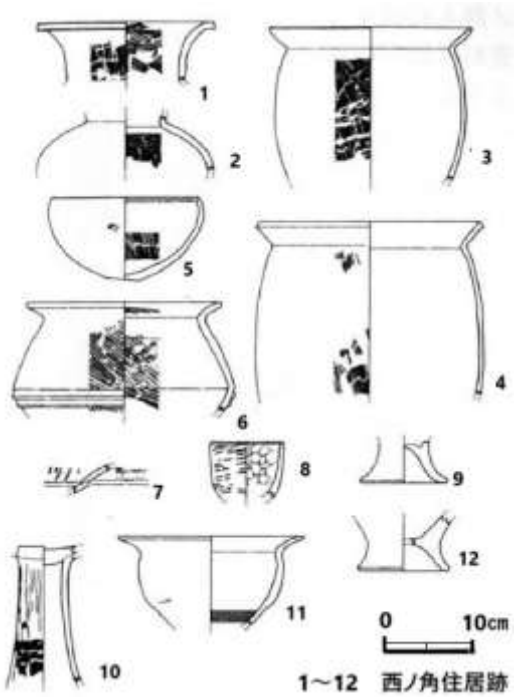
後期5は台付甕Ⅱ類Gや同Hが主体で、高坏形土器は前代の高坏C類、同D類に加えて同G類が出現する（第1図）。

なお、後期5の終焉は久住猛男や檀佳克が提唱するB系統（近畿第V様式系土器群）、C系統（庄内式系土器群）、D系統（布留式系土器群）の搬入系土器（檀2011）が当地へ流入する直前とする。

以下、地域ごとに概観する。

① ソノキ

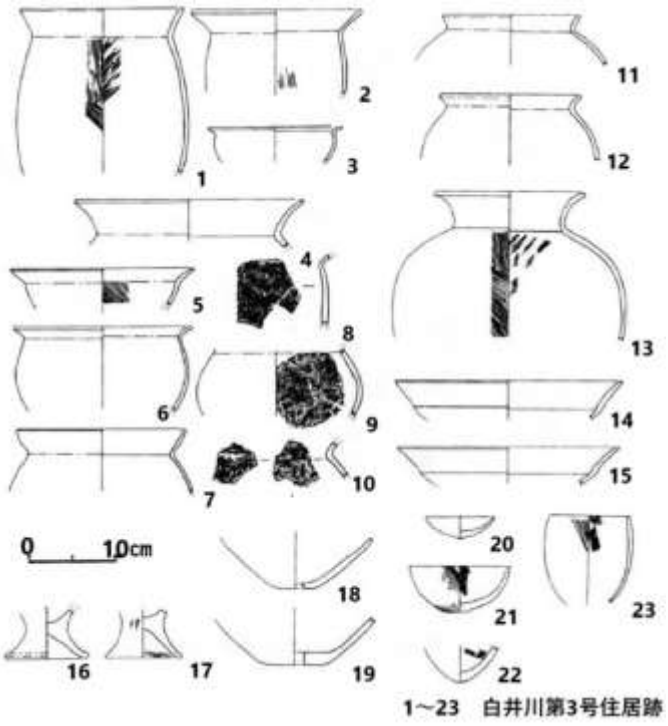
同地域で後期5の指標となる土器群は東彼杵町の白井川（しらいがわ）遺跡3号住居跡出土土器（第21図1～23）である。内彎する口縁をもつ台付甕Ⅱ類G（同図7）や口縁部が直立気味の台付甕Ⅱ類H（同図1）などの「島原半島系土器」がある。高坏形土器は後期5の指標であるG類が出土している（同図 14, 15）。宮﨑も同住居跡出土土器は当該期であるという認識である（表4）。



第18図　後期4の土器（タカク南部④）S=1/9

②タカク北部

同地域で後期5の指標となる土器群は雲仙市伊古遺跡水漬け遺構出土土器（第22図1～19）である。遺物の一括性が担保できないため、包含層出土扱いとなるが、台付甕H類（同図 3）と高坏G類（同図 7, 8）の存在から当該期に編年した。同図2のような「島原半島系土器」も存在するが、同土器とは趣を異にする同図 5, 18 などが共伴するため、筆者は前代に引き続き、「島原半島系土器」と肥後の土器の影響を受けた在地の土器と理解している。



第21図 後期5の土器（ソノキ）S=1/9

③タカク南部

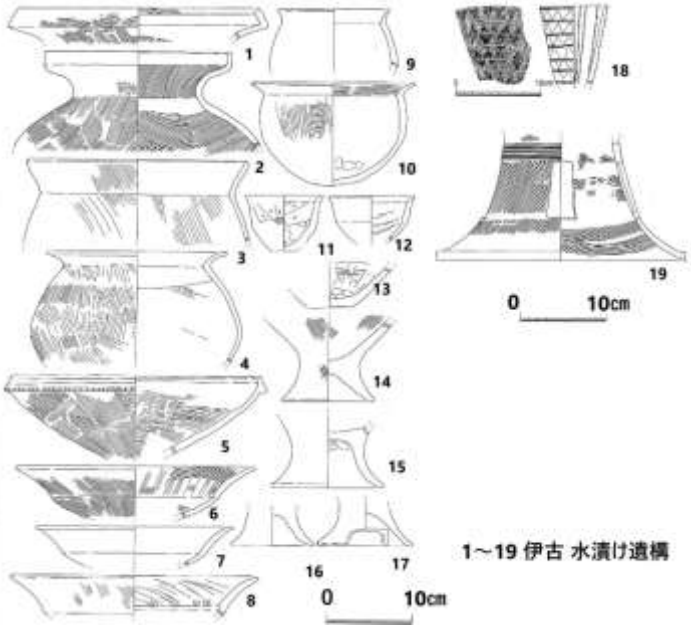
同地域で後期5の指標となるのは南島原市の二本櫨（にほんはぜ）遺跡を標式遺跡とする二本櫨式土器である（第23, 24図）。前代の後期4に出現した「島原半島系土器」を継承しており（古門 2024）、詳細は筆者の別稿を参照していただきたい。

以上のように当地の後期5は後期4と同様にソノキ、タカク北部、同南部の三地域で土器様相が大きく異なっている。タカク南部では前代の「島原半島系土器」を継承しているが、タカク北部では後期 4 に引き続き、肥後の土器の影響を受けつつ、同時に「島原半島系土器」の影響も受けた在地の土器が用いられている。

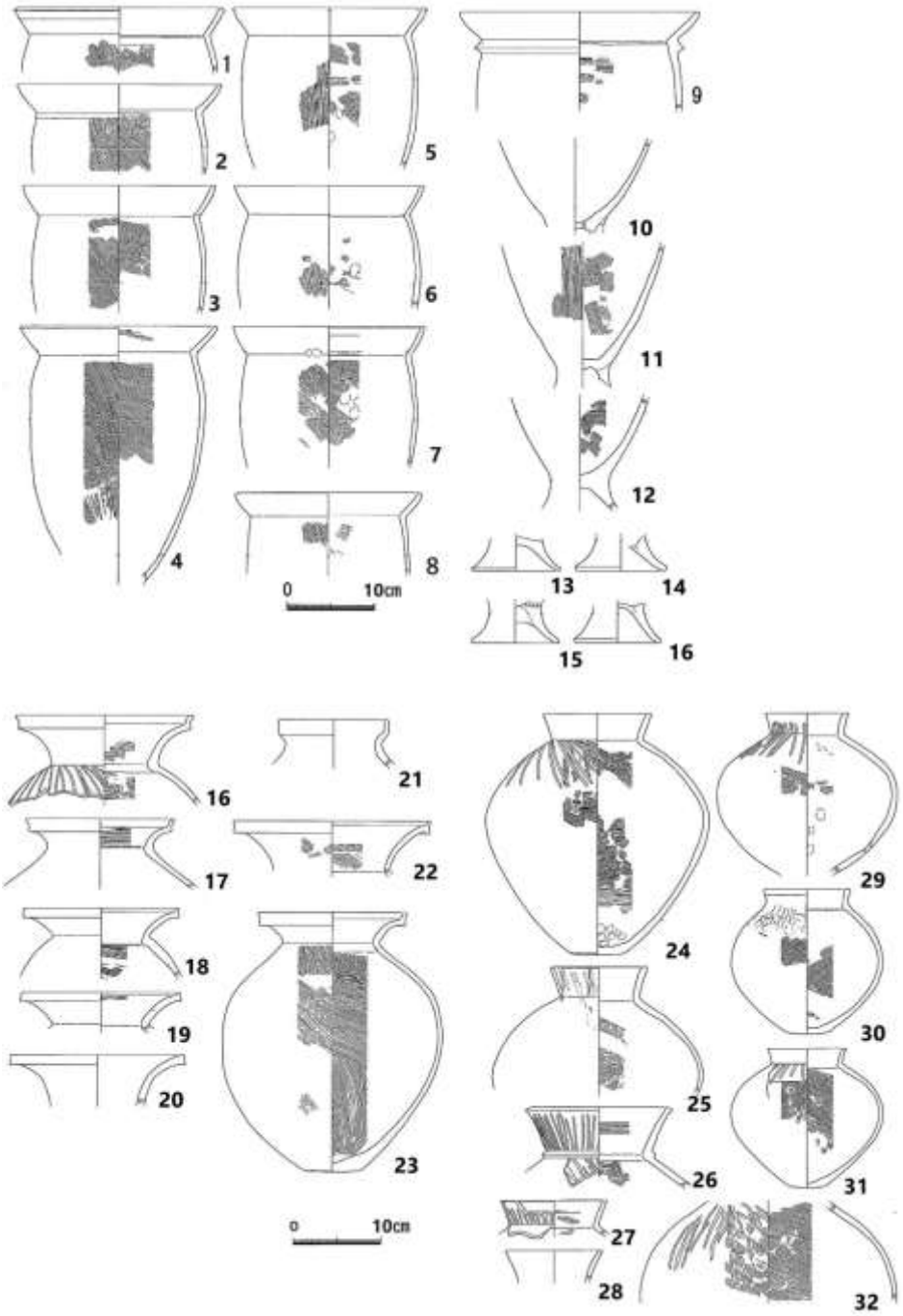
一方、ソノキは「島原半島系土器」や肥後の土器の影響は見られるものの、顕著ではない。

（7）弥生後期1～5の相対年代

ここからは弥生後期1～5の相対年代を検討する。弥生時代中期であれば、広域に展開する須玖式土器様式や黒髪式土器様式などが存在し、それらと在地土器の共伴により相対年代が想定できるが弥生後期は土器の地域色が顕著となり、隣接地の土器の相互比較が難しい。本県本土部で体系的な土器

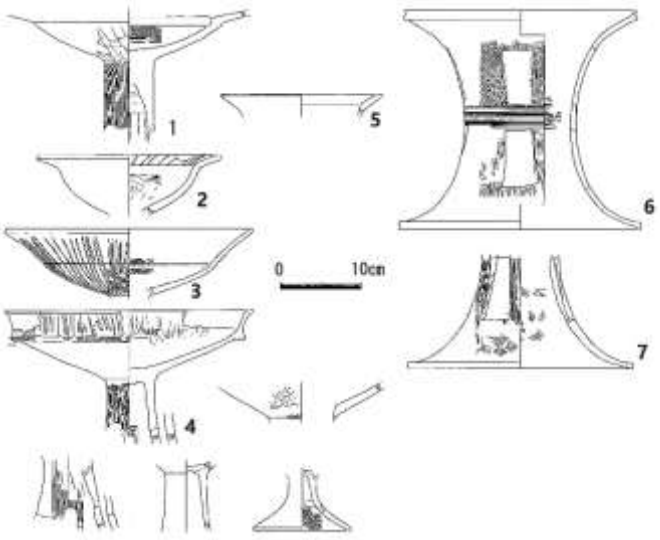


第22図 後期5の土器（タカク北部）S=1/9



第23図　後期5の土器（タカク南部①）二本櫂式土器 S=1/9

編年が未だ確立していない現状では、隣接地にそれを求めざるを得ない。島原半島に隣接する肥後の場合、北部の菊池川や中部の緑川・白川流域の土器編年は整備されつつあるが、「島原半島系土器」とは台付甕や壺形土器の形状が異なり、特に肥後中部の白川・緑川流域で盛行するＳ字状口縁の高坏や、肥後型複合口縁壷など特徴的な土器は島原半島に及んでいない。ただし前述のように後期４と５ではタカク北部の土器が肥後北部の菊池川流域に展開する野部田式土器の影響を受け、在地化している様相が窺える。在地化しているため肥後地方の土器と直接比較することが難しく、「似て非なる」と言う表現がふさわしい土器群である。



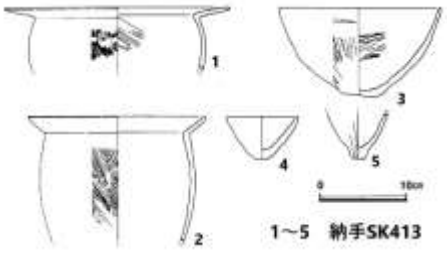
第 24 図　後期５の土器（タカク南部②）二本檀式土器　S=1/9

一方で「島原半島系土器」との関連が強いと感じる土器は肥後中部の宇土半島から同南部の球磨川下流域の土器である。肥後南部の弥生後期土器編年は、木崎康弘や檀佳克が検討して以降、進展していないようである（木崎 1996, 檀 2004）。

また、薩摩半島北部の薩北地方に展開する弥生後期の台付甕を含む土器様式として松木薗式土器が知られているが（本田 1984）、球磨川下流域以南の台付甕との比較検討が進んでいない。したがって、これまで述べてきた当地の弥生後期の各時期に相対年代を与えるために参考となる土器編年は、隣接する肥後地方よりも現状では、蒲原宏行の佐賀平野の土器編年が有効であると筆者は考える。同編年は多くの安定した一括資料を用いて本来の編年手法に則って構築されており、高坏形土器や壺形土器、特に短頸の壷形土器の型式組列は参考になる。ここからは、同編年を参考にして本稿で設定した各時期に相対年代を与える。

後期１は相対年代の決め手となる資料が少ないため、後期２から検討する。同期の相対年代の決定にあたっては袋状口縁から変化した複合口縁の壺形土器の属性に注目する。複合口縁をａからｆに分けた蒲原宏行による分類に従えば、後期２の複合口縁はｂないしｃに該当し、この口縁部を持つ壷ＡⅠb、ＡⅠc、ＡⅡb2、ＡⅡc が帰属する土器様式は村徳永２式期（後期前半古段階）から村徳永３ 式期（後期新段階）となる。

さらに先述した佐賀県武雄市納手遺跡の SK413 は翼状口縁の台付甕ないし同鉢（第 25 図 1）に「く」の字口縁の台付甕（同図 2）が伴う当該期の遺構であるが（武雄市教委 1986）、共伴した鉢形土器（第 25 図 3）は蒲原編年のＡｂ類で、帰属年代は村徳永２式期（後期前半古段階）から千住１式期（後期中頃）である。以上のような根拠から本稿の後期２は後期前半として大過ないで



第 25 図　佐賀県武雄市納手遺跡出土土器①
S=1/9

表３　蒲原編年と宮﨑・古門（本稿）の時区分の対比

宮﨑2024		蒲原2003,2019		古門（本稿）	
時期区分	相対年代	土器様式	相対年代	時期区分	相対年代
—		村徳永１式	中期末ないし後期初頭	中期２	中期末
				後期Ⅰ	後期初頭
Ⅰ	後期初頭	村徳永２式	後期前半古段階	後期２	後期前半
Ⅱ	後期前葉古段階	村徳永３式	後期前半新段階		
Ⅲ	後期前葉新段階	千住１式	後期中頃	後期３	後期中頃
Ⅳ	後期後葉古段階	千住２式	後期後半古段階	後期４	後期後半
Ⅴ	後期後葉新段階	惣座０式	後期後半新段階		
Ⅵ	後期末古段階	惣座１式	—	後期5	後期終末
Ⅶ	後期末新段階	惣座２式	—		

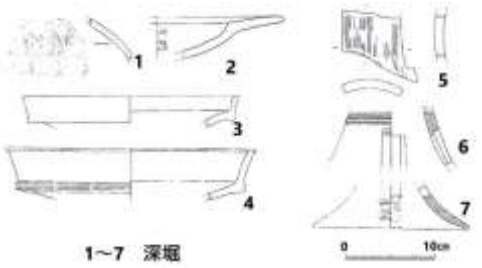
表４　宮﨑による遺構の時期（上）と古門（本稿）の同時期（下）

時期＼地域		彼杵・大村	諫早	島原半島北部	島原半島南部
後期	Ⅰ期	TAK201407①区SK10 TAK201506②SK9			今福遺跡第2号溝
	Ⅱ期	TAK201303A5区SC1 TAK201303BI区SC123 TAK291407①SC6		佃84区SB1 一野2号住居跡	
	Ⅲ期	TAK201406③区SC11			
	Ⅳ期	TAK201407④区SC13 TAK201506②SC15 TAK2013033B1区SC124		佃87区SB1	
	Ⅴ期	TAK201407④SC12	西ノ角住居跡		今福遺跡第3号溝
	Ⅵ期	白井川3号住居跡		十園26区SD01	今福C9,10住居跡
	Ⅶ期				

時期＼地域		ソノキ	タカク		
		彼杵・大村	諫早	島原半島北部	島原半島南部
後期	後期1	TAK201407①区SK10 TAK201407①区SK11 TAK201407④区SC13			今福遺跡第2号溝
	後期２	TAK201406③区SC11 TAK201407①区SC8 TAK201407②区SC19 TAK201506②SK9 TAK201303BI区SC123 TAK201506②SC15 TAK291407①SC6 TAK2013033B1区SC124		佃遺跡87区SB1 佃遺跡87区SB1土器棺	
	後期3	TAK201303A5区SC1 TAK201404A6東区SP69	開1号住居跡	佃84区SB1 一野2号住居跡	
	後期4		西ノ角住居跡	十園27区SB01 十園26区SD01 伊古D6区調査区外東側	今福遺跡第3号溝 今福C9,10住居跡
	後期5	白井川3号住居跡		伊古水漬遺構	二本樋式土器

あろう。

次に後期４の相対年代を検討する。同期は高坏C類、D類（第１図）の出現も指標とする。本稿の高坏C類は蒲原の分類によれば高坏ＥⅠa、ＥⅠｂ、ＥⅡa、ＥⅡｂである。同類について蒲原は千住１式期（後期中頃）から同２式期（後期後半古段階）の相対年代を与えている（蒲原 2003, 2019）。一方で高坏D類は蒲原分類によると高坏ＥⅠc およびＥⅡc である。帰属時期は惣座０式期（後期後半新段階）である。したがって本稿の後期４を弥生後期後半とすることができよう。



第 26 図　スカの弥生時代後期の土器　S=1/9

後期５は高坏G類（第１図）の出現を指標とする。本稿の高坏G類は蒲原の分類によれば高坏A類である（蒲原 1991, 2019）。高坏A類は惣座１式期から惣座２式期まで継続する。ちなみに同期は弥生時代終末（＝古墳時代早期）とされるので（檀 2011）、本稿の後期５は弥生時代終末とすることができる。

以上のように本稿の後期２は後期前半、後期４は後期後半、後期５は弥生時代終末の相対年代が与えられるので、それらの前後の時期である後期１を後期初頭、後期３を後期中頃とする。

６　宮﨑編年との比較

（１）宮﨑貴夫の土器研究

冒頭の学史の項でも述べたように宮﨑貴夫は長年、本県の弥生土器研究を牽引してきた研究者である。研究にあたって氏は、研究が進み体系的に整理された地域の編年枠の中に在地の土器型式を落とし込むという手法をとる。氏の最近の編年として肥前型器台の研究に用いた編年案（宮﨑 2022b）と片刃石包丁の研究に用いた編年案があり（宮﨑 2024）、いずれも特定の遺物の時期決定のための物差しとして使用されている。直近の 2024 年の編年案では蒲原宏行の佐賀平野の編年をもとに後期を７期に分けている。各遺跡から出土した片刃石包丁と共伴する弥生土器に７期いずれかの時期を与えている。しかし良好な一括資料を除き、時期決定にいたる根拠が示されずに結果のみが提示されているため、個々の土器の帰属時期を追検証することは筆者の力不足も相まってここでは留保せざるを得ない。そのため本稿では、宮﨑が編年に用いた遺構出土土器群のうち、本稿でとりあげた遺構出土土器群と同一のものを取り上げ、その帰属時期を比較検討することにした。

（２）宮﨑による遺構の時期認定との比較

表 4 は宮崎の 2024 年段階の遺構の時期認定と本稿のそれを上下に並べたものである。前述のように本稿で取り上げた遺構と同じ遺構を中心に掲載している。

なお、遺構の時期認定に係る宮﨑と本稿と蒲原編年との関係は表３の通りである。ただ蒲原と宮﨑では相対年代の呼称に違いがあることに留意する必要がある。宮﨑による遺構の時期認定と本稿のそれを比較した場合、遺構から出土する土器の変遷はほぼ一致している。しかし遺構から出土した土器群の帰属時期が宮﨑と筆者で異なるため、同じ遺構であるにも関わらず、所属時期が異なっているところが少なからず見受けられる。そのことは本文中でも指摘してきた。当地では良好な遺構一括出土資料が絶対的に不足しており、各形式の型式組列が明らかでない。そのような本県本土部の土器事情に鑑みれば、両者の相違は現状では致し方ない所であろう。資料は確実に増えつつあるので、今後折に触れて比較検討する必要がある。

７　スカの弥生時代後期の土器

最後に、スカ（長崎市近郊）の深堀遺跡出土土器を検討する（第26図1～7）。同遺跡は長崎（野母）半島の西の付け根付近に位置し、縄文時代前期から近世まで不断に続いた遺跡である。市街地化したため、開発に伴う調査が中心で、その全容は未だに明らかではないが、同遺跡出土の弥生後期土器の一部は『新・長崎市史』に掲載されている。高坏A類（第26図2）、壷G類（同図3）、高坏C類（同図4）、肥前型器台（同図6,7）が確認できる（新長崎市史編さん委員会編2013）。いわゆる「島原半島系土器」で、本稿の弥生後期4か5に該当する。同遺跡が長崎（野母）半島西側に位置することから、「島原半島系土器」が島原半島南部だけではなく、角力灘（五島灘）沿岸にも分布し、両地域の海民に共有された土器様式であった可能性が窺える。

８ まとめ

ここまで長崎県本土部の中でソノキ、タカク、スカという県南部を中心に弥生中期後半から後期の土器の整理を行い、遺構から出土した資料を中心に中期を2期、後期を5期に分類した。さらに中期1を中期後半、中期2を同末、後期1を後期初頭、後期2を同前半、後期3を同中頃、後期4を同後半、後期5を同終末とする相対年代を与えた。

当地の弥生後期土器は後期3まではほぼ同じ型式の土器を用いているが、後期4（後期後半）にはタカク北部と南部の一部に肥後の野部田式土器様式の影響を受けた在地土器が出現し、タカク南部には「島原半島系土器」が成立することを示した。

一方で県央のソノキの土器は両者の影響が稀薄であり、弥生時代後期後半の三地域にはそれぞれ異なった土器様式が存在したことを明らかにした。この状況は後期5（弥生終末）にも引き継がれていたことも示した。しかし、古墳時代前期初頭の遺跡であるタカク北部の龍王（りゅうおう）遺跡や、タカク南部で橘湾沿岸に位置する有喜上原（うきうえはら）遺跡の住居跡出土土器を見る限り、肥後の土器の影響は認められず、北部九州や畿内からの影響を受けた搬入系土器と「島原半島系土器」が主体である。したがって弥生後期終末の当地の土器様相を見る限り、後期後半から見られた肥後の菊池川流域を中心とする土器文化の影響は後期5（後期終末）のある時点で失われたことが窺える。

以上が本県本土南部の弥生時代中期後半から後期に至る土器の概要である。

なお、本稿の土器分類の基準は台付甕の口縁部形状の変化という単一の属性であるため土器編年というより土器変遷とすべきであろう。

また、本県では今までがそうであったように、編年に適した良好な一括資料が飛躍的に増えるわけではない。今後ともこれまでのように先行研究や研究先進地に学びながら、例えそれが他地域と比較して周回遅れであっても、研究の歩みを継続していかねばならないと考える。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり檀佳克、野澤哲朗、濵村一成、宮﨑貴夫、渡邊康行の各氏に大変お世話になった。芳名を記して感謝申し上げる。

また、島原市一野遺跡出土土器の実測にあたっては同市教育委員会社会教育課の山下祐雨氏にご高配を賜った。

さらに、雲仙市陣ノ内遺跡出土土器の実測にあたっては同市教育委員会生涯学習課の辻田直人、

村子晴奈、早稲田一美の各氏より多大なご支援をいただいた。それぞれに、この場を借りてお礼申し上げる。

2025（令和7）年2月8日　脱稿

【註】

註1　宮﨑貴夫は本県本土部の弥生後期の在地系の壺形土器を検討し、富の原型・竹松型、西ノ角型、今福型の三型式に分類した（宮﨑2022a）。これらの土器は地域を異にして分布しているが、それぞれの分布範囲は本稿のソノキ、タカク北部と南部の一部、それ以外の南部に一致する。

註2　本県本土部の弥生後期土器の変遷を考察するにあたり、台付甕の口縁部の多様性に着目するという視点は八女市教育委員会の檀佳克氏からご教示をいただいた。

註3　今福遺跡出土土器の宮﨑分類に係る高坏D類は下大隈式系土器の高坏で、口縁部が外方に開き、坏部外面の屈曲の位置が高く、坏部全体の高さの上位（口縁部近い位置）にくる。本稿で新たに加えた高坏G類は西新式土器系の高坏で、坏部外面の屈曲の位置が杯部全体の高さの中間ないし下位に位置する型式である。筆者による前稿「【研究ノート】長崎県南島原市二本(にほん)櫨(はぜ)遺跡出土の「島原半島系土器」」では筆者の高坏D類の理解が曖昧であった。

註4　なおタカク南部は遺構出土土器に乏しく、表1,2から除外した。

註5　第3図の※印の甕型土器は田崎編年による須玖Ⅰ式新段階の土器である。混入と思われる

註6　須玖Ⅱ式土器新段階の土器に黒髪式土器（黒髪Ⅱ式土器）が共伴することは既に中園聡や田崎博之が明らかにしている（中園1996、田崎1998）。先行する黒髪Ⅰ式土器も含め黒髪式土器は台付甕以外の形式の具体的な様相が明確になっているわけではないと筆者は認識している。

註7 別遺構という考えは土器の新旧差の型式差を合理的に説明する仮説であり、新旧の型式差をもつ土器が同一時期に用いられた可能性を排除するものではない。

註8　本稿で用いる野部田式土器は木崎康弘の編年に従う（木崎1996）。近年、福田匡朗によって菊池川流域の弥生後期土器編年が提起されているが（福田2011）、そこで用いられている野部田式土器とは時期と内容が異なる。福田編年には檀佳克の批判がある（檀2014）。

註9　肥後の弥生後期の壺形土器を概観すると前述の菊池川流域では朝顔形ないしラッパ状に開くと形容される直口縁の壺形土器が主体であるのに対し、熊本県中部の白川・緑川流域では肥後型複合口縁と呼ばれる口縁部を持つ壺形土器が主体である。一方、同県南部の球磨川流域では島原半島系土器と同様に複合口縁の壺形土器が主体となるが、その形状は「く」の字口縁の一方を反転して相対させ、「＜　＞」を呈する複合口縁である。島原半島系土器のようにに口縁部を直立させる型式となると、さらに南の薩北地方に多く見られるものの、肥後南部から薩北地域の複合口縁壷は口径が短い型式のものが多いのに対し、「西ノ角型壺形土器」のように短頸の広口壷の口縁部を直立させるのは「島原半島系土器」のみである。

註10　宮﨑貴夫によると直立した複合口縁の壷形土器の中でも短頸で、口径の短いもの（第15図8）は「島原半島系土器」には見られないという。確かに第1－2図の同遺跡出土土器の型式分類一覧表には掲載されていない。直立した複合口縁の壷形土器は佐賀県唐津市中原遺跡でも出土しており、小松譲が肥後・島原半島系土器として報告した資料にある（小松2013、古門2024）。同土器は鹿児島県薩摩川内市の外川江（そとかわえ）遺跡などで出土している複合口縁壷と似ているが（鹿児島県教編1984）、同一型式ではないようで、その出自や系譜は今後の課題である。

註11 雲仙市教育委員会の村子晴奈氏より御教示。

【引用・参考文献】

雲仙市教委編 2010『伊古遺跡Ⅲ』弥生時代～中世編　雲仙市文化財調査報告書第 8 集　雲仙市教育委員会

鹿児島県教委編 1984『外川江遺跡・横岡古墳』高城川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　鹿児島県文化財調査報告書第 30 集　鹿児島県教育委員会

蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器様相ー佐賀平野の場合ー」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』16 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
後に『弥生・古墳時代論叢』所収　六一書房 2019

蒲原 宏行 2003「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』27 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
後に『弥生・古墳時代論叢』所収　六一書房 2019

木崎康弘 1996「総括４．弥生時代後期土器群の編年学的研究」『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告第 158 集　熊本県教育委員会

熊本県教委 1992『うてな遺跡』県代行台堀切線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査　熊本県文化財調査報告書第 121 集　熊本県教育委員会

小松 譲 1998「N. まとめ　1. 佐賀平野の弥生中期後半～後期初頭の土器群『坊所三本松遺跡』筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書５　佐賀県文化財調査報告第 136 集　佐賀県教育委員会

小松 譲 2013「2, 唐津地域出土の肥後系・島原半島系土器群」『中原遺跡』Ⅶ （ 第一分冊）　11 区～ 13 区の集落跡の調査　西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書 佐賀県教育委員会

佐賀県文化課文化財保護室編 2020「第２節　弥生時代集落・墓地出土遺物の総括　1. 土器」『吉野ケ里遺跡』弥生時代総括編１　佐賀県文化財調査報告書第 227 集　佐賀県文化課

武雄市教委編 1986「納手遺跡」『六角川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』下巻　武雄市教育委員会

武末純一 1991「第三節　北九州における弥生時代の複合口縁壷」『土器からみた日韓交渉』学生社
初出は『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982 年

武末純一 1997「1. 須玖式土器」『弥生文化の研究 4』弥生土器Ⅱ　雄山閣

田崎博之 1998「日本における石器から鉄器への転換形態の研究」平成７年度～9 年度科学研究費補助金（基礎研究 B）研究成果報告書

檀　佳克 2004「人吉盆地における古墳時代の土器編年についてー系統的視点からみた併行関係の再検討ー」『熊本古墳研究』第２号　熊本古墳研究会

檀　佳克 2011「土師器の編年①九州」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』(株)同成社

檀　佳克 2014「菊池川流域における「器台」について」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集

中園　聡 1996「弥生時代中期土器様式の併行関係：須玖Ⅱ式期の九州・瀬戸内」『史淵』133　九州大学文学部

長崎市史編さん委員会編 2013『新長崎市史』第１巻（自然編、先史古代編、中世編）長崎市

西健一郎 1983「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』第 12 集　古文化研究会

福田匡朗 2011「菊池川流域における古墳時代初頭前後の土器編年」『熊本古墳研究』第４号　熊本古墳研究会

古門雅高 2005「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古』第６号　西海考古同人会

古門雅高 2020「弥生後期の土器」『竹松遺跡Ⅴ』九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ長崎県教育委員会

古門雅高 2024「【研究ノート】長崎県南島原市二本櫨(にほんはぜ)遺跡出土の「島原半島系土器」」
https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/shimabara.pdf

本田道輝 1984「松木薗 1 号住居址出土土器とその意義」『鹿大史学』鹿大史学会
松藤和人 1975「永瀬貝塚」『口之津貝塚（旧三軒屋貝塚）及び口之津烽火（のろし）遺跡調査報告』百人委員会
宮﨑貴夫 1986「Ⅱ弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅲ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　長崎県文化財調査報告書第 84 集　長崎県教育委員会
宮﨑貴夫 2022a「在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺の検討―弥生時代後期の長崎県本土地域を中心として―」『西海考古』第 12 号　西海考古同人会
宮﨑貴夫 2022b「肥前型器台の再検討ー地域性と形式変遷についてー」長崎県埋蔵文化財センター紀要　第 12 号　長崎県埋蔵文化財センター
宮﨑貴夫 2024 「竹松遺跡の片刃石包丁について」長崎県埋蔵文化財センター紀要　第 14 号　長崎県埋蔵文化財センター

【挿図出典一覧】

第 1 図　長崎県教委編 1986　『今福遺跡Ⅲ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　長崎県文化財調査報告書第 84 集　長崎県教育委員会

第 1-2 図　同上

第 2 図 1,2　新幹線文化財調査事務所編 2019『竹松遺跡Ⅳ　弥生・古墳編』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 11 集　長崎県教育委員会

同 3～8　長崎県教委編 2018『立小路遺跡』長崎県文化財調査報告書 第 216 集　長崎県教育委員会

第 3 図 1～60　国見町教委編 2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書　第 5 集　国見町教育委員会

第 4 図 1～10　新幹線文化財調査事務所編 2019『竹松遺跡Ⅳ　弥生・古墳編』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 11 集　長崎県教育委員会

第 5 図 1～12　雲仙市教委編 2024『火箱遺跡』雲仙市文化財調査報告書　第 20 集　雲仙市教育委員会

第 6 図 1～7　長崎県教委編 1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書　第 73 集　長崎県教育委員会

第 7 図 1～14 新幹線文化財調査事務所編 2019『竹松遺跡Ⅳ 弥生・古墳編』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 11 集　長崎県教育委員会

第 8 図 1～28　長崎県教委編 1986　『今福遺跡Ⅲ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　長崎県文化財調査報告書第 84 集　長崎県教育委員会

第 9 図 1～17　新幹線文化財調査事務所編 2019『竹松遺跡Ⅳ 弥生・古墳編』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 11 集　長崎県教育委員会

同 18～22　新幹線文化財調査事務所編 2020『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 12 集 長崎県教育委員会

同 23～47　新幹線文化財調査事務所編 2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 6 集 長崎県教育委員会

同 48～58　新幹線文化財調査事務所編 2020『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 12 集 長崎県教育委員会

同 59～67　新幹線文化財調査事務所編 2019『竹松遺跡Ⅳ 弥生・古墳編』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 11 集　長崎県教育委員会

第 10 図 1～15　国見町教委編 2013『佃遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書第 12 集　国見町教育委員会

第 11 図 1～17　新幹線文化財調査事務所編 2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 6 集 長崎県教育委員会

同 18,19　新幹線文化財調査事務所編 2019『竹松遺跡Ⅳ 弥生・古墳編』新幹線文化財調査事務所調査報告書

第 11 集　長崎県教育委員会
第 12 図 1～6　有明町教委編 2001『一野遺跡Ⅱ』有明町文化財調査報告第 14 集　有明町教育委員会
同図 7,8　長崎県教委 2007『開遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第 193 集　長崎県教育委員会
第 13 図 1～17　国見町教委編 2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書　第 5 集　国見町教育委員会
第 13-2 図 1～13　同上
第 14 図 1　瑞穂町教委編 1998『陣ノ内遺跡』瑞穂町文化財調査報告第 3 集　瑞穂町教育委員会
第 15 図 1～24　雲仙市教委編 2017『十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ』雲仙市文化財調査報告第 16 集　雲仙市教育委員会
第 16 図 1～41　長崎県教委編 1986　『今福遺跡Ⅲ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　長崎県文化財調査報告書第 84 集　長崎県教育委員会
第 17 図 1～26　同上
第 18 図 1～13　長崎県教委編 1986　『今福遺跡Ⅲ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　長崎県文化財調査報告書第 84 集　長崎県教育委員会
第 19 図 1～8　武雄市教委編 1986「納手遺跡」『六角川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』下巻　武雄市教育委員会
第 20 図 1～12　長崎県教委編 1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第 73 集　長崎県教育委員会
第 21 図 1～23　東彼杵町教委編 1990『白井川遺跡Ⅱ』東彼杵町文化財調査報告第 4 集　東彼杵町教育委員会
第 22 図 1～19　雲仙市教委編 2010『伊古遺跡Ⅲ』雲仙市文化財報告第 8 集　雲仙市教育委員会
第 23 図 1～25　南島原市教委編 2024『二本櫨遺跡』南島原市文化財調査報告書　第 37 集　南島原市教育委員会
第 24 図 1～7　同上
第 25 図 1～5　武雄市教委編 1986「納手遺跡」『六角川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』下巻　武雄市教育委員会
第 26 図 1～7　長崎市史編さん委員会編 2013『新長崎市史』第 1 巻（自然編、先史古代編、中世編）長崎市